

平成20年度 前期 (第4期) 研究教員

研究報告集録

第 4 号

はじめに

<小学校音楽科>

- 生き生きと歌う児童の育成
— 合唱指導の工夫を通して —

宮古島市立南小学校
福原 理恵子

平成20年9月

宮古島市立教育研究所

は じ め に

これからの教育には、変化の激しい時代にあって、子ども一人ひとりの個性を尊重し、自ら考える力や豊かな人間性など「生きる力」を育てていくことが重要になっています。このため、学校教育の直接の担い手である教員に教師としての資質力量が求められています。

①教師としての使命感、②人間の成長・発達についての深い理解、③幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、④教職等に関する専門的知識、⑤広く豊かな教養等はいつの時代にも求められる資質能力であります。

教師は最初から「教師である」のではないと思います。教師という仕事を通して、しだいに「教師になる」そのために努力が必要であり、「教師になるための研修」がきわめて重要であります。

教育改革が論じられている昨今、最も重要なのは現場の教師改革であり、日々の授業改善だと思います。実践者である教師一人ひとりの成長であります。教育研究所はプロ教師としての資質力量形成の機会であり、場であります。

宮古島市立教育研究所がスタートしてから、3期（1期2人、2期1人、3期1人）間小学校、中学校の教員が、それぞれの研究テーマにそって研究を修了し、学校現場で波及効果を及ぼし大きく寄与しているところであります。

本年度は、4期生（1人）が修了しました。この集録は第4期（前期）の6ヶ月間取り組んだ研究の概要をまとめたものです。本研究は、アンケートにより調査を行い、日々の授業実践の反省を分析・考察しながら、「合唱指導」の在り方について研究を深めてきました。

音楽教育をとおして、日々の授業改善・これまでの課題解決のために研究主題を設定し、理論研究・実践研究と一連の研究で、しっかりとした目的意識をもって研究が進められ、研究成果もあげることができました。また、研究をとおして教師としての自分を磨き、成長したと思います。

この度の研究成果が各学校における授業改善に役立ち、教育実践者として一緒に考える機会になることを期待しています。

結びに、研究員の主体的な研究的態度に敬意を表し、研究を進めるに当たってご指導いただきました琉球大学の緒方先生、音楽科の先生方、学校、関係各位に心から感謝申し上げます。

平成20年9月
宮古島市立教育研究所
所長 本村幸雄

平成20年度 前期

研究報告書

〈小学校音楽科〉

生き生きと歌う児童の育成

～合唱指導の工夫を通して～



宮古島市立教育研究所 第4期研究教員

宮古島市立南小学校 福原 理恵子

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究目標	1
III	研究仮説	1
IV	検証計画	2
V	研究の構想図	3
VI	研究計画	4
VII	理論研究	
1	音楽科教育	5
(1)	目標	
(2)	音楽的活動	
2	歌唱指導	6
(1)	生き生きと歌うことの捉え方	
(2)	高学年の子どもと音楽的な特徴	
(3)	一人一人が楽しく歌い合おうとする態勢作り	
(4)	歌心を育てる ―グループで高める―	
3	発声指導	
(1)	呼吸法に支えられた歌唱表現の指導	7
(2)	共鳴をつけて歌う指導	7
(3)	体操・発声練習の理念と指導法	8
(4)	目的に合った発声法	9
(5)	声のトラブルについて	10
(6)	歌い方の悪い例とその原因・それを直す方法	11
(7)	発音について	13
4	合唱について	
(1)	豊かな合唱をつくりあげる学習	14
(2)	音楽の内容を感じ取ることの指導	14
(3)	児童の学び合いを通じた曲想表現を目指して	15
5	評価について	15
(1)	題材の評価方法と単の進め方	15
(2)	ステップごとの活動とチェックポイント	16
VIII	実践研究	
1	検証授業指導案	18
2	授業仮説の検証	22
IX	研究のまとめ	
1	研究仮説(1)の検証	26
2	研究仮説(2)の検証	29
3	研究の成果と課題	32
4	おわりに	33
	〈主な参考文献・引用文献〉	34
	〈資料〉	35

生き生きと歌う児童の育成

— 合唱指導の工夫を通して —

宮古島市立南小学校 福原 理恵子

I テーマ設定の理由

近年、都市化や少子化が進展し、子どもたちを取り巻く環境が変化する中、子どもたちの人と関わる体験活動の充実や「豊かな人間性の育成」を重視しながら人間関係を育む取り組みの充実が求められている。本県においても、「平成20年度学校教育における指導の努力点」の第一に「豊かな心」の育成が位置付けられている。

豊かな人間性をいかに育てるかという具体的な方策としては、様々な取り組みが考えられる。中でも、言葉による伝え合う力、すなわちコミュニケーションの能力を高めることは、極めて有効な取り組みの一つである。例えば、合唱指導は、児童が一体となって一つのものを創り上げていく表現活動であり、児童一人一人のもっている特性を十分に出し合い、お互いに認め合いながらコミュニケーション能力の育成を含めた音楽活動を幅広く行うことができる領域であると考えられる。合唱は、豊かな人間性を培うためにも、多様な音楽を幅広く直接体験することが可能であり、音楽を伸び伸びと表現することで、音楽的感受性を豊かにし、表現力を養うことができる。これらのことが、すなわち、豊かな人間性を培うことにつながっていくものと考えられる。

しかし、最近の児童を見ると、特に高学年になるにつれて、歌う表情が乏しく、歌う声も小さくなり、姿勢や態度も意欲の見られない児童が多く、心から楽しんで歌っている子が少なくなってきたように思われる。

さらに、友達同士のコミュニケーション不足も感じられ、曲に対する思いを共有し、合唱を生き生きと表現する児童が育たないという現状がある。これらの原因としては、歌う自信のなさ、楽曲の良さを知らないこと、または、友達とのコミュニケーションを通して一つのものを創り上げる喜びを知らないことなどが考えられる。

児童自ら意欲を持って学習に取り組ませるには、発声指導を通して、自分の声に自信をもたせるとともに、子どもたちが、これまでの生活経験を生かし、曲のイメージを膨らませることができる教材選択の工夫をすることが必要である。さらに、合唱指導における場の設定を工夫することで、お互いの声を聴き合ったり、曲想表現を練り合ったりさせることにより、合唱をする楽しさを味わうことができるだろうと考える。

以上のことから、合唱指導において、一人一人に歌いたいという意欲を持たせる工夫と、声の重なりを味わいながら、学び合いが実現できる合唱指導の工夫を実践的に研究することによって、生き生きと歌う児童が育まれると考え、本研究テーマを設定した。

II 研究目標

生き生きと歌う児童を育成するために、一人一人に歌いたいという意欲を持たせる工夫と、声の重なりを味わいながら、学び合いが実現できる合唱指導の工夫を実践的に研究する。

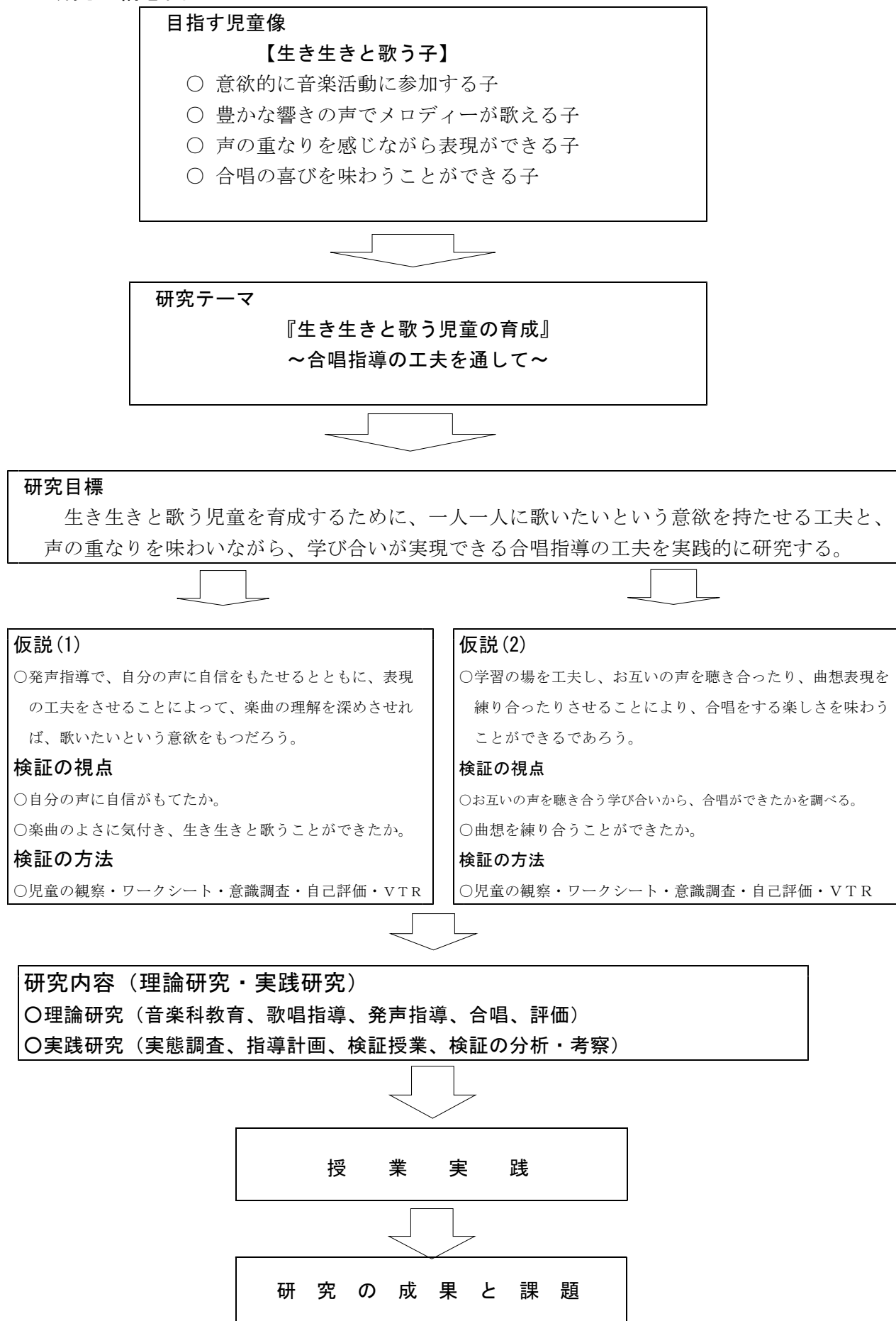
III 研究仮説

- 1 発声指導で、自分の声に自信をもたせるとともに、表現の工夫をさせることによって、楽曲の理解を深めさせれば、歌いたいという意欲をもつだろう。
- 2 学習の場を工夫し、お互いの声を聴き合ったり、曲想表現を練り合ったりさせることにより、合唱をする楽しさを味わうことができるであろう。

IV 検証計画

研究仮説	検証目標（視点）	検証資料（方法）	検証場面	検証結果
<p>仮説（１）</p> <p>○発声指導で、自分の声に自信をもたせるとともに、表現の工夫によって、楽曲の理解を深めさせれば歌いたいという意欲をもつだろう。</p>	<p>○自分の声に自信がもてたか。</p> <p>○楽曲のよさに気づき、生き生きと歌うことが出来たか。</p>	<p>○児童の観察（抽出児童）</p> <p>○ワークシートの活用</p> <p>○意識調査（自作アンケート）</p> <p>○自己評価</p> <p>○V T R</p>	<p>○実践の過程</p> <p>○実践の過程</p> <p>○実践の前後</p> <p>○実践の過程</p> <p>○実践の過程</p>	<p>○チェックリストの記録をグラフに表す。</p> <p>○ワークシートの記録を集計する。</p> <p>○数量化してグラフに表す。</p> <p>○数量化してグラフに表す。</p> <p>○記録をそのまま表現する。</p>
<p>仮説（２）</p> <p>○学習の場を工夫し、お互いの声を聴き合ったり、曲想表現を練り合ったりさせることにより、合唱をする楽しさを味わうことができるであろう。</p>	<p>○お互いの声を聴き合う学び合いから、合唱ができたか。</p> <p>○曲想表現を練り合うことができたか。</p>	<p>○児童の観察</p> <p>○ワークシートの活用</p> <p>○意識調査（自作アンケート）</p> <p>○自己評価</p> <p>○V T R</p>	<p>○実践の過程</p> <p>○実践の過程</p> <p>○実践の前後</p> <p>○実践の過程</p> <p>○実践の過程</p>	<p>○観察記録をそのまま表現する。</p> <p>○ワークシートの記録を集計する。</p> <p>○数量化してグラフに表す。</p> <p>○数量化してグラフに表す。</p> <p>○記録をそのまま表現する。</p>

V 研究の構想図



VI 研究計画

月	研究内容	研究所 行事・計画
4	<ul style="list-style-type: none"> ・研修テーマの設定・検討 ・参考文献・資料の収集 ・参考文献・研究資料による理論研究 	2日 第四期入所式 3日 オリエンテーション 4日 研究の進め方① 7日 研究の進め方② 9日 全体構想図について 11日 テーマ検討会① 16日 テーマ検討会② 17日 緒方先生研究支援(テーマ設定理由について) 21日 テーマ検討会③ 23日 全体構想図検討会① 28日 全体構想図検討会②
5	<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容の進捗状況から今後の取り組みについて検討 ・参考文献・研究資料による理論研究 ・中間検討会の資料作成 ・検証授業の計画・調整・教材研究 	7日 理論研究について 12日 研修進捗状況 16日 中間報告会に向けて 16日 緒方先生研究支援(テーマ設定理由について) 21日 中間報告会 23日 報告書作成に向けて 26日 検証授業に向けて
6	<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容の進捗状況から今後の取り組みについて検討 ・参考文献・研究資料による理論研究 ・児童の実態把握のためのアンケート調査 ・検証授業の計画・調整・教材研究 ・指導計画、指導案作成 	11日 検証授業指導案検討会① 12日 検証授業開始 16日 検証授業指導案検討会② 18日 検証授業指導案検討会③ 20日 検証授業指導案検討会④ 20日 緒方先生研究支援(理論研究について) 27日 検証授業指導案検討会⑤
7	<ul style="list-style-type: none"> ・教材研究 ・検証授業の準備 ・検証授業の実施 ・児童の変容を見るためのアンケート調査 ・検証授業の分析・まとめ・仮説検証 ・研究成果の作成 	3日 検証授業(公開) 18日 緒方先生研究支援(理論研究について)
8	<ul style="list-style-type: none"> ・研修報告書の作成 ・文献資料の整理 ・報告書検討会への準備 ・報告書内容の検討 	1日 研究成果報告会に向けて 1日 報告書検討会① 13日 報告書検討会② 15日 報告書検討会③ 18日 報告書検討会④ 20日 報告書提出(印刷)
9	<ul style="list-style-type: none"> ・研修成果報告会の準備 ・研修報告書のまとめと反省 ・研修報告会 ・研修のまとめと反省 	3日 研究成果報告会 22日 第四期長期研究教員 修了式

Ⅶ 理論研究

1 音楽科教育

人間はその特性として、生まれながらに音楽を聴いたり、表現したりしようとする意欲をもっている。子どもに音や音楽への興味をもたせるようにし、音楽の直接的な体験を通して、子どもの中に潜んでいる音楽活動の諸能力を育てていくことが大切であると考えられる。

(1) 目標

学習指導要領の音楽科の目標

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

「小学校学習指導要領解説音楽編」から音楽の目標を解釈すると、多様な音楽を幅広く直接的に体験することにより、音楽を愛好する心情、音楽に対する感性が育つこと。そのことと音楽活動の基礎的な能力は密接な関係にあり、常に相互に関連させながら豊かな情操を養っていくことの重要性を述べている。中でも、歌唱は、豊かな音楽活動をするための基礎と考えられ、各学年毎に児童の発達を考慮した学習の工夫が示されている。

- 低学年では・・・感覚的な面を一層重視して、児童一人一人が生き生きとした楽しい音楽活動を体験し、音楽への興味・関心を高めるようにする。
- 中学年では・・・感覚的なものに知的なものを加味した音楽体験を通して、音楽活動しようとする意欲が高まるようにする。
- 高学年では・・・知的な面を一層重視して、味わいの深い音楽体験を通して、音楽活動を楽しむ態度と習慣を育てていく。

(2) 音楽的活動

音楽的活動における表現の基本的な活動として、歌唱と器楽の演奏が挙げられるが、表現の内容では、次のような項目が示されている。

範唱・・・模範となる歌唱
範奏・・・模範となる楽器の演奏
模唱・・・真似をして歌うこと
暗唱・・・覚えて歌うこと
視唱・・・楽譜などを見て歌うこと
視奏・・・楽譜などを見て楽器を演奏すること

音楽の学習では、音楽的活動の基礎的な能力を培うために、児童が楽しいと感じ、様々な音楽の能力を経験的に身に付ける学習活動が大切である。その中でも、自分の声を出し、歌を歌うことは、様々な音楽活動に直接的に結びつきやすく、音楽の基礎ともなりうる。歌うことは、児童が自ら音楽を感じ取って進んで活動し、自分の感じたことや心に思い描いたことを声で表現しながら歌い、音楽の美しさを感じ取りながら、主体的に活動することができる能力が求められるからである。このように、音楽の表現活動においては、児童の発達段階によって、学習を工夫し、表現の能力を育てていくことで、生活の中にある様々な音楽にも関心をもたせ、生活の中で音楽に親しむ態度と習慣を身に付けることが期待できる。下記の表に音楽活動における表現能力の諸要素を示す。

音楽活動における表現の能力の諸要素

リズム、旋律、強弱、速度、調、音色、和音や和声、拍の流れやフレーズなど、

2 歌唱指導

(1) 生き生きと歌うということの捉え方

児童は、本来歌うことが好きである。しかし、「低学年のころはあんなに楽しそうに歌っていたのに、高学年になるとあまり歌いたがらない」という声をよく耳にする。意欲をもって学習活動に取り組ませるには、音楽の楽しさを味わわせ、合唱を通して、みんなと音楽を創り上げていくことの楽しさを感じさせることが必要であると考えます。

学年が進むに従って、個々の児童の学習の仕方、興味・関心の持ち方などに差異が現れてくる。一人一人が生きる楽しい音楽学習にするためには、個人差を正しく把握しながら、一人一人の児童の個性を豊かにのばしていくことが必要となる。その際、単に知識・技能面だけを捉えずに、興味・関心や意欲・態度までを含めて多面的に捉えることが大切である。

学習過程に表れる個人差の側面には、①達成度としての学力差、②学習速度、学習の仕方の個人差、③学習意欲、学習スタイルの個人差、④興味・関心の個人差、⑤生活経験的な背景の個人差、などが認められている。(文部省「小学校教育課程一般指導資料Ⅲ」1984)

みんなと音楽を創り上げていくためには、児童が興味・関心をもって、主体的に取り組んでいけるような授業を工夫していく必要があると考えます。そのためには、個人の能力を集団において生かしていけるような学習形態を工夫し、集団における相互教育力が生かせるような指導法が求められる。さらに、児童が歌ってみたいと、興味を持って音楽的活動に取り組んでいけるような教材の工夫も必要である。また、個々の歌唱能力を高めるうえで、発声法を工夫し、コンプレックスを取り除き、自信をもって歌う喜びを味わわせたい。楽しく歌いながら、様々な楽曲に挑戦させることで、合唱の楽しさを感じ取らせていくことができると考えます。

(2) 高学年の子どもと音楽的な特徴

高学年の子どもたちは、低学年や中学年の頃とは違って、自己中心的な考えや行動から次第に社会性が発達するとともに、ものの見方が客観的になってくる。また、この時期は、精神的にも肉体的にも成長し、知的理解や論理的な思考ができるようになる。音楽の学習における、歌唱表現活動においては、斉唱から輪唱、交互唱、合唱へと多様な表現を楽しむ活動を通して、音楽の魅力や表現のすばらしさを追い求めることができるようになる。

子ども達が自主的に活動し、創造的に音楽に関わることが出来るようになるので、これまでの学習経験を生かして、主体的に音楽活動をし、音楽によって生活を潤わせながら、豊かな表現を目指した学習へと結び付けていくことも可能となってくる。

(3) 一人一人が楽しく歌い合おうとする態勢作り

一人一人が楽しく歌い合おうとする態勢を作るためには、以下に示すようなのびのびと声を出させるための心理的側面からの手立てが必要である。

○雰囲気づくり・・・・・・・・一人一人が素直で明るい児童の集まりになるように笑いのある楽しい学習時間とする。

○実態の把握・・・・・・・・一人一人がどのような声の状態かを調査し、児童の実態を把握する。(発声曲「おなかの体操」を使って声域調査を行う)

○座席・並び方の工夫・・・音程が同じもの同士を付近に集め、さらに、音程が不安定な児童の側に音程がしっかりとれる児童を配置し、友達の声を聴き合いながら練習ができるような座席や並び方を工夫する。

(4) 歌心を育てる ―グループで高める―

熊木(2004)は、「学習指導要領の内容でいえば、『つくって表現する』活動は、合唱においては、よりよい表現を皆で目指して努力していくから、グループ活動をすることによって、仲間と共に作品をまとめ、心を動かしながら、そこで生じた気持ちを仲間と分かち合うことが得られる」と述べており、「共創の学び」から表現力育成の活動の充実を求め、お互いの工夫から、互いの存在を認め合うことの大切さを指摘している。グループ活動の良さは、そのメンバー同士が関わり合

い、互いにアイディアを出し合い、それに対する意見を述べ合うことによって、よりよい音楽を創り上げていくこと、その中で、子ども達は他者の意見に共感したり反発したり、一人一人が様々な心を動かしながら、仲間の前で発表し、自分の気持ちを仲間と共に分かち合っていくことである。

つまり、それは、教材を通して、自分達の思いを表現することである。自分達の創造した音楽として学んでいくことは、歌心を通して、自分達の思いを合唱で表現することであり、仲間と一緒に創り上げた表現を楽しむことによって、「豊かな表現」が生まれると捉えることができる。

3 発声指導

高学年では、「豊かな響きのある、自然で無理のない声」を原則とし、曲想に合った表現を目指して、呼吸法や共鳴の指導を充実していく必要がある。なぜなら、呼吸や発音、声の出し方に気を付けて歌うことや、演奏の仕方を身に付けることは、豊かに音楽を表現して楽しむことの基盤となるからである。こうした演奏技能の習得の必要性を児童一人一人に感じ取らせるようにするとともに、個々のもつ表現意欲を大事にしながら、能力に応じて個性を生かした学習を進めるようにする必要がある。しかし、技能面のみを重視した指導法ではなく、歌唱技能を高めたいという意欲をもたせ、より美しく表現する態度や能力を育てながら、音楽的活動に取り組みさせることが大切である。

「声」は自分自身ではなかなか確認できないものであるからペア学習を取り入れ、友達と関わり合うことで、自分の学習の成果をお互いに確かめ合いながら、仲良く学習を進めていけるような授業へとつなげていきたい。そのためにも、「よい声」を聴き分ける訓練、声を出すための姿勢、呼吸法や声を出すために使う筋肉のトレーニングなども必要になってくる。

(1) 呼吸法に支えられた歌唱表現の指導

歌を歌う時は、言葉をしゃべる時と違って、声の高さ、大きさなどを自由にコントロールできる息が必要となる。そうした息を出すための横隔膜の動きをスムーズにできる呼吸を「腹式呼吸」という。歌唱表現を行う時は、息つきから息つきまで呼気を保てるよう、腹式呼吸に支えられた歌い方を目指しながら、よい声を出して歌っていく。横隔膜を意識しながら、コントロールしていくためには、腹筋、背筋、骨盤筋を動かし、横隔膜を動かせる筋肉を鍛えなければならない。特に、腹筋を鍛えることによって、歌うための息をスムーズに使えるようにすることが大切である。この複式呼吸を訓練することによって、強弱やクレッシェンド、デクレッシェンドなどのいろいろな表現に生かされ、息を長く保持することが可能になってくる。

(2) 共鳴をつけて歌う指導

声の出る仕組みは、のどぼとけの奥にある声帯によって作られ、息を吸うと、声帯の隙間（声門）が開き、発声する時には、この隙間は閉じる。この開閉を1秒間に100～200回を繰り返すことによって、振動が起こり、音が出るのである。声帯で作られた音は、雑音のままなので、共鳴腔（口腔、鼻腔、副鼻腔、咽頭など）と構音器管（舌、唇、軟口蓋など）によって美しい響きをもった声に変える。

声の出る道が広く開き、「あくびのど」にして気道を開き、良い共鳴を得られるようにすれば、いい声が出るのである。しかし、生理学的な仕組みを理解し、児童に身体が楽器であることを理解させるのは、困難である。そこで、毎日、ハミング唱や ロングトーン、スタッカート唱の練習で共鳴のついた発声を身につけ、共鳴の訓練を指導していくことが、子ども達の自信を持って歌えるようないい声作りへとつながるのである。

(3) 体操・発声練習の理念と指導法

(小学生のヴォイストレーニング 橋本静一著 1997)

発声練習には、さまざまなパターンがあり、それらには必ず一定の目的があり、おなかの動きや響き作り、脱力などがある。また、発声練習を母音で歌うことは、口形の変化を意識させ、響きを確認しながら、練習していくことの大切さを伝え、口を開けすぎると、顎に力が入り、喉が締め付けられて硬い声になるので、自然な声で「アエイオウ」の順に口形を変化させることに気を付けなければいけない。そこで、日々の練習の始めに行うべき体操と発声練習には、次のような意味がある。

① 現在の自分というものを確認する作業。

- 故障箇所の発見、または、疲労の個所の発見
- 可動部分（関節・筋肉）の連携プレイの復習
- 意識・視線なども含めて、可動範囲を無理なく拡大するためのアイドリング

(準備体操)

② 確認された楽器（肉体）の状態を、必要に応じ修理・改善する作業。

- 故障や疲労を解消する
- 可動範囲を最大限に拡大する
- それらの方法の一つとして〈発声練習〉を行う

歌う前の身体の準備体操として、体操は、声を出さずにやる発声練習であり、発声練習は声を出しながら行う準備体操であると考えられる。ただし、注意することは、「体操」でも「発声練習」同様、「儀式的」ではいけない。「なんのための体操か」ということを自分なりに感じてやるのが大事なのである。それは、一見同じ体操でも、各個人によって意味が違ってよい。

身体は、歌うための楽器であるため、全身をリラックスさせながら、よくほぐし、無理な力を抜いて、歌を歌うことが出来るように柔軟体操を行うと、歌唱指導に効果がある。そのため、次のような体操を取り入れ、喉や肩に余分な力をいれずに、歌う前の気持ちをゆったりと保つことが大切である。

〈例1〉アベック体操・・・2人がペアになり、1人が体操をしている間、もう1人は相手の体に触ったり、観察したり、場合によってはマッサージをする。（「声」は自分自身ではなかなか確認できないものであるから証人を立てるということ。）

〈例2〉コンニャク体操・・・全身の筋肉を緩めることによって咽喉内の筋肉とそれに不随する筋肉までも緩めることのできる心身共にリラックスさせる体操。

〈例3〉フェイストレーニング・・・歌う表情を柔らかくしながら、明るい響きの声で歌う為の練習。

〈授業での実践例〉

人前で歌うことの抵抗をなくすために、「フェイストレーニング」を行い、共鳴腔をつくることを自然に覚えるようにした。それは、①まゆ毛は 最大限、上に上げる（まゆ毛トレーニング）。この練習は、共鳴腔を開く筋肉を育てるための練習で、響きが上に行くための練習法である。教師が、手を叩いた瞬間に児童に驚いた時の表情をさせる。その表情が大きさであればあるほどよい。だが、児童は、恥ずかしがってなかなか思い切った表情ができない。教師が模範を示すことで、自然に模倣し表情豊かに顔の筋肉が鍛えられていくのである。

その時に「まぶたトレーニング」も行い、教師が手を叩いた合図で、児童は、②目をカッと開く。この練習方法は、目に表情をつけて歌うようにすることを目的とし、響きが上から

出るように意識するための方法である。静かにリラックスしながら、身体の余計な力を抜いて、手を叩く合図と共に、瞬間的に顔の表情をつけていくのである。

さらに③鼻翼をつり上げる（鼻翼トレーニング）練習。発声器官の鼻腔共鳴をつくる筋肉の訓練ともなる。方法は、号令で、鼻腔をいっぺんに上につり上げ、鼻の穴がよく開くようにする。

④唇を上下に開く（唇トレーニング）この方法は、一つ一つの唇を使った言葉をはっきりさせるために行う。歯を閉じたまま、歯が見えるくらい上下に唇を開く。この時、上唇が鼻につくぐらい開けさせるため、鉛筆を上唇にのせてトレーニングする。

次に、⑤ほっぺたを上げる（ほお骨トレーニング）。共鳴する場所を開けるため、手でほお骨をもって上に上げ、顔の筋肉がマッサージするのである。この時、喉に力が入らないようにし、ほお骨を手で触りながら、ほっぺたが上に上がるのを確認する。このように、「フェイストレーニング」をすることにより、人前で歌うことへの抵抗や緊張を解きほぐしていく。そうすることで、歌う時の姿勢、口形、顔の表情、腹筋、のどに力を入れないひびき、音程など、歌唱の注意点をそれぞれの曲で意識付けをし、曲の速さもその時の児童の実態に応じて、児童が歌うことを楽しいと感じられるような工夫をした。

児童は、まず、立って歌う時に気を付けることを確認し、ヒップアップ・ホッペアップの歌詞に合わせて、身体のどこを意識させるのかを捉えながら、歌うことができた。さらに、口形をはっきりさせるために、「くちびるたいそう」の1～4番までを歌い唇を使って、は行・ば行の練習や舌を使って、ら行・た行の練習を行うことができた。

このように、児童が歌う意欲をもちながら、音楽的活動に参加することによって、今まで自分でも気が付かなかった自分の声がどんどん高い音まで出るようになり、その結果として、歌う楽しさを感じていくことができる。

(4) 目的に合った発声法

児童が、楽しみながら、また、どのようなことに気を付けながら声出しを行うのかをイメージしやすい発声曲に以下の6曲を取り上げることができる。おなかを使って呼吸感覚を身に付け、おなかの動きを意識しながら、レガートやスタッカートを取り入れて歌わせ、子どもの実態に合わせて、歌うテンポも変えると、さらに効果が期待できる。

授業で扱った発声曲

- ①「楽しい発声のドリル（1）（2）（3）」 作詞・作曲（岩河三郎）
 - ◎「楽しい発声のドリル（1）」・・・喉を開き響きをつける練習
 - ◎「楽しい発声のドリル（2）」・・・喉の脱力
 - ◎「楽しい発声のドリル（3）」・・・腹筋をつかってスタッカートの練習
- ②「くちびるたいそう」 作詞（まどみちお） 作曲（鈴木敏朗）
 - ・「くちびる」と「したべろ」の体操を通した発音の練習。
- ③「ヒップアップ ホッペアップ」 作詞・作曲（加賀清孝）
 - ・歌う姿勢や歌う表情を意識する練習。
- ④「おなかの体操」 作詞・作曲（鎌田典三郎）
 - ・腹筋や口形を意識する練習。

このような発声法を授業の導入で扱うことによって、児童は、楽しく歌唱活動に参加することができる。授業の目的に応じて、発声曲も選曲しながら、合唱指導へと結び付けることができる。

(5) 声のトラブルについて

① 嘔声について

代表的な症例に「嘔声」がある。「嘔声」の構造を理解すると、他のトラブルに対する対応も自ずと見えてくる。橋本(1997)は、嘔声の直接の原因は、1つしかないと述べている。

声のトラブルの原因と対策 (橋本静一「小学生のヴォイストレーニング」1997)

[大きな故障や変化の予兆・合併症・または後遺症] である。[歌いすぎ] [どなる習慣] [睡眠不足] [演奏会へのプレッシャー] などのストレスの何割かは、成長過程での一過性のアンバランスであり、小学生ならば、思春期の大変動の予兆にすぎない。そこで、声のトラブルの原因の対策について下記のことが考えられる。

① 声量不足の原因とその基本対策

- 1 自分の声に自信を失っている場合。
- 2 呼吸に必要な筋肉が虚弱な場合。
- 3 技術的な迷路に迷って共鳴をふさいでいる場合。

自分の声に自信を失っている場合の対策としては、音域の狭い子にコンプレックスを持たせずに指導する方法として、橋本(1997)は、「声域は、よほどの障害がない限り、だれでも2オクターブ以上を持っているので、基本的には、重心を下げ、首筋の力を抜いて発声すれば、相当の音域が発声可能である」と述べている。高音域へのコンプレックスによって、頭頂から腰回りまでの背面が硬化していると思われるため、軽くマッサージしてみると効果が期待できる。

呼吸に必要な筋肉が虚弱な場合の対策は、瞬間的に吐いた呼吸を瞬間的に吸う呼吸法(瞬間腹式呼吸法)の応用が「スタッカートの基本」である。瞬間的に押し込めている腹筋を逆に押し出す呼吸法を訓練することで、呼吸に必要な筋肉が鍛えられ、喉にも負担をかけずに訓練することができる。

技術的な迷路に迷って共鳴をふさいでいる場合の対策としては、唇を閉じた発声全般の様々なハミングでの練習法を取り上げ、鼻腔を広げ、舌根を硬化せず、また、胸に力を入れないことなどに気を付けながら、顔面や首筋のマッサージを十分に行うことで、共鳴をスムーズに行うことがハミングの練習から期待できる。

② 変声期の指導

竹内(2004)は、「変声は、いわゆる第二次性徴の一つの現象で、声帯の一方を支える甲状軟骨が発達し、それらの影響で声帯が伸びて、男子では、約2倍もの長さになることにより、声域がぐっと下がるといった現象が起こる。ところがこの現象は徐々に進行していくうちに、まわりの筋肉などとのバランスが崩れ、コントロールがしにくい状況になる。男子の変声の過程では、一時的に声域が極端に狭くなったり、声そのものがかすれたり、また、急にひっくり返ったりして不安定になるなどの状態がよく見られる。こうした場合は、無理に歌わず、楽に出る音だけを軽く出すようにして、後は心の中で歌う、などの工夫も必要になる。また、女子では、男子ほどはっきりしないものの、やはり声がかさつくなどの状況を経て、豊かなつやのある声に変化していく。」と述べている。高学年の歌唱指導においては、このように、変声を迎えた児童へは配慮を示し、この時期に歌う意欲が減退したりしないようにしていく必要がある。そのため、変声期の段階における声の様子やその際の指導における心理的配慮事項を理解し、合唱を楽しませるために留意する必要があると考える。

変声期中の子どもの歌唱指導と、変声後の子どもへの歌唱指導は、当然異なり、また、変声の前期においては変声を迎える心構えも指導し、まわりの子どもが笑ったりしないように注意しなければならない。変声期の段階においての男子の声帯の特徴について子どもたちに理解を持たせ、この時期が子どもたちにとって灰色の音楽学習にならないように配慮したい。

「変声期の過程と留意点」(竹内秀夫「イラストでみる合唱指導法」2004)

変声期の段階		声の様子	指導における 心理的配慮事項
1	変声期	安定して澄んだ子どもの声	この時期は比較的歌唱の中心になれるので、自由にのびのびと歌うよう指導する。特に合唱の場合は、高音部の音色安定剤としてソプラノパートに含める。この場合、できる限り男子1人でなく2人並べてソプラノパートへ入れる。
2	変声初期	声のざらつき、鈍重化、軽度のさ声 (かすれ声)	この時期では音域はまだ広いが、平均して音色もよくなり、かすれ声が目立つ。ソプラノパートに入れておいても、無理に叫んだりしないように指導する。苦しいときはいつでも先生に申し出ること。パートの変更を考る必要もあり。この時期に入ると、心理的にも女子生徒の中で歌うのを極力嫌がる子が目に付く。
3	変声中期	息漏れ、シャーッという雑音、つや不足	変声期の代表のようなもので、音域も狭くなり、本人にとって苦痛の連続である。医学的には声帯の安静を主張される場所であるが、音楽学習の中心的活動が歌唱であるだけに、無理をしない範囲で大人の声へ向けて有効かつ適切な指導法を模索していかなければならない。その中において、音楽的・心理的立場から、継続的観察も強いられる時期である。そこで、無理にならない程度に歌わせ、自信喪失や音楽嫌いに陥らないように配慮する必要がある。
4	変声後期	音高不安定、声のひっくり返り	音高等多少不安定なところがあっても、快方に向かっているのを徐々に安定してくることを話す。音のひっくり返りがあっても気にせず、どんどん歌っていくように指導する。
5	変声後	低音域の安定、ひっくり返しなし	安定したひびきも十分出せるので、本格的なひびかせ方を要求してもよく乗って歌える。この時期が、男子の合唱好きが多く見られるようになるときでもある。

(6) 歌い方の悪い例とその原因・それを直す方法

高学年になると、歌詞の内容や楽曲の構成にふさわしい曲想表現への意欲が高まるため、中学年の歌い方をより発展させ、曲想表現に合う呼吸や発音の仕方も工夫して、豊かな響きのある声で歌うようにすることが大切なこととなる。これまで、中学年においては、低学年における歌詞の表す情景や気持ちを想像して歌い、一つ一つの言葉の意味する歌詞全体の内容を感じ取りながら歌ってきた。表現の仕方を工夫するのは、歌詞と旋律、歌詞とリズムの関連を感じ取りながら、音楽を特徴付けている要素を(リズム、旋律、強弱、速度、音色、和音)感じ、それらの相互の関わりから表現を工夫して歌ってきたのである。歌詞の内容にふさわしい曲想表現への意欲が高まるため、呼吸や発音の仕方に気を付け、自然で無理のない声で歌うようにし、児童の声帯に無理がかからない歌い方を指導し、伸び伸びとした歌声で歌う活動を行ってきた。

そこで、これまでの歌い方を生かし、高学年では、音の重なりや和声の響きの美しさを感じ取ることを重点に置いて、指導しなければならない。そのためには、児童一人一人の声の持ち味を生かして、心身ともに成長の過程にある児童の声帯に無理のかからない歌い方を重視し、伸び伸びとした歌声で歌う活動をするために、一人一人の声の実態を把握しながら、その原因に対処できる方法を以下の表にまとめ、具体的な練習方法を取り上げてみた。

各パートの悪い例と、それをなおす練習方法（渡瀬昌治「教師のための合唱指導と実践」1983）

パート	悪い例	原因	練習方法
ソプラノ	・声がかさかさとして いる。	・息もれが多い。 ・声があたる所にあたっていない。	・スタッカートで練習。
	・声が固い。	・あごなどに力が入る。 ・体全体が緊張している。	・あごを動かし、力をとる。 ・肩を動かす。 ・歩きながら歌ってみる。
	・音のピッチが低い。	・声があたる場所が悪い。	・ピアノの音に合わせて、練習する。
	・のどがしまる。	・高い音を出す時など、のどをしめて声を出そうとする。	・「オ」の口の形で練習する。 ・あくびをした感じで、のどを開いて歌う。
アルト	・表情がない。	・アルトは、ハーモニーの支えなどで、音があまり動かない時がある。	・ソプラノのメロディーを歌ってみることによってメロディーの表情をアルトにつける。
	・低い音が地声になる。	・低い音を出す時、のどがしまり、横隔膜で声を支えることができなくなる。	・頭声発声を心がける。 ・口の中や胸をよく広げて共鳴腔を大きくつくる。
	・響きが少ない。	・よく、口先だけで歌っている場合がある。	・口の中をよく開け、体全体で歌う ・姿勢に気を付ける。
	・高い音が出ない。	・響きが太くなったまま、高い声に行く。	・高い声は、高い音になればなるほど、響きを集める。
男子	・音程が低い。	・特に高音の音程が下がる。	・ハーモニーの中の自分の音を見つける。 ・頭声発声を心がける。 ・自然な声の出し方を教え声の支えをしっかりとる。
	・高音をのどで歌う。	・高音を出す時、あごが上がって、のどで歌うことがある。	・あごを動かしたり、鏡を見て、あごが上がらないようにする。
	・豊かな響きが出ない。	・口の中が開いてなく、共鳴する場所が少ない。	・あくびをする感じで、口の中を開ける。 ・「ソフトボールを1個入れたように、口の中を開ける」と話してやる。
	・つくり声になる	・いろいろな場所に余力な力が入り、声がかもることがある。	・言葉を朗読する練習をする。（口の中をよく開け、遠くに言葉がとどくようにする）
	・言葉がはっきりしない。	・母音が響いて、言葉がはっきりしない場合がある。	・唇で、子音をはっきり出す。

橋本(1997)が、「声を出す作業が肺からのエネルギーとする以上は、呼吸法がとても大切な要素である」と、述べているように、吐く息は、声帯を通して声になる。息を吸いすぎると、逆にいっぺんに出てしまい、声量を保てなかったり音程が乱れやすくなる。一般に悪い意味で使われる胸式呼吸は、肋骨を広げる胸郭呼吸をする時に、鎖骨を上げ肩を上げてしまうことによって、喉の周辺に力みが入ってしまう呼吸法である。それに対し、良い意味で使われる腹式呼吸は、横隔

膜を引き下げることが強調することによって、上胸部の脱力を図る呼吸法である。渡瀬(1983)は、腹式呼吸と胸式呼吸の違いを示し、また、このような呼吸法をした時、どのような状態の変化が見られるのかを示している。この違いを理解し、児童の学習時に、呼吸法の違いを見付け、指導に役立てていけるようにしたい。

よい呼吸と悪い呼吸 (渡瀬昌治「教師のための合唱指導と実践」1983)

よい呼吸 (腹式呼吸)	悪い呼吸 (胸式呼吸)
<ul style="list-style-type: none"> ・背中や横腹に息を吸い込む感じで吸うと、背中や横腹が膨らむ。 ・息を吸った時、肩が上がらない。 ・吸気は、おなかのまわりで吸う。 ・息を吸った時、のどや体に力が入らない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・息を吸った時、腹がへっこみ、胸だけが膨らむ ・息を吸った時、肩が上がる。 ・息を吸った時、吸気の「ハー」という音が聴こえる。 ・プレスが浅い。 ・のどや体全体に力が入る。

(7) 発音について

発音には、話し言葉としての発音、歌唱における言葉の発音の二つに大別される。口腔内の舌の運動の変化によって形成される母音(イ エ ア オ ウ)と、唇、歯茎、舌、口蓋等を使って、共鳴腔(口など)が狭くされたり、閉鎖されたりする状態の中で形成される子音に分かれる。さらに子音には、破裂音、摩擦音、破擦音、弾音、鼻音に分けられる。

それぞれの子音の特徴

①破裂音・・・	空気の通りが閉鎖され、瞬間的に開放された音。
②摩擦音・・・	空気の通りが舌や唇によって、口腔が狭くなった状態のところを通過するときに行われる摩擦音で持続子音である。
③破擦音・・・	破裂音ができる運動作用と摩擦音ができる運動作用の結合したもので、閉鎖してこする感じである。
④弾音・・・	舌の先で歯茎付近を1回たたきとき振動する音。そり舌音ともいう。
⑤鼻音・・・	鼻子音、鼻母音ともを含み、けんよう垂が下がり、空気が鼻腔を共鳴させる音。

【子音の音節語の発音の仕方】

調音点 子音		両唇(音)	歯茎音	口蓋音		けんよう垂	声門
				軟口蓋	硬口蓋		
破裂音 閉鎖音から解放する音	無声	パピブペポの子音	タテトの子音	カキクケ			
	有声	バビブベボの子音	ダデドの子音	ガギグゲ			
破擦音 閉鎖音と摩擦音	無声		ツの子音 チチャチュチョの子音				
	有声		語頭のザジズゼゾの子音 語頭のジャジュジョの子音				
摩擦音 狭められた音	無声	フの子音	サスセソの子音 シシャシュショの子音			ヒヤ ヒユ ヤ ヒヨ ユ ヨ	ハ ヘ ホ
	有声	ワの半母音	語中のザズゼゾの子音 語中のジジャジュジョ				
弾音 叩く音	有声		ラリルレロの子音				
鼻音	有声	マミメムモの子音	ナニヌネノの子音 ニヤニュニョの子音	カ ^h キ ^h ク ^h ケ ^h コ ^h の子音 (行鼻濁音)			拗音の一種

歌詞の中で、大切な言葉を聴いている人に伝えるためには、口形を意識しながら、正しい発音

で美しく発音を行う。そうすることによって、気持ちを込めて、一つ一つの言葉を丁寧に歌うことができる。

授業で意識させた子音の発音

(カ行)	っか	っき	っく	っけ	っこ…	Kの発音をすどく意識させるため、小さく「っ」を言いながら発音する。 (舌根と軟口蓋によってつくり出される子音)
(サ行)	っさ	っし	っす	っせ	っそ…	Sの発音を息を使って発音する。 (上の歯と舌の隙間から息を強く出してつくりだされる摩擦音の子音)
(タ行)	った	っち	っつ	って	っと…	Tの発音を舌を使って発音する。 (舌を強く上の歯に押しつけ、瞬間的に舌を上歯から離すことによってつくられる破裂音)
(ハ行)	っは	っひ	っふ	っへ	っへ…	Hの発音を腹筋を使って発音する。 (声帯の振動によってつくり出される上下の唇の間の摩擦音)
(バ行)	んば	んび	んぶ	んべ	んぼ…	Bの発音を口唇を使って発音する。(口唇破裂音)

4 合唱について

合唱の素晴らしさは、他の人との協同でハーモニーを体験できることである。この体験を高学年の児童において、歌う意欲を高めながら様々な合唱曲に取り組みせたい。歌唱指導において、高学年の重点は、「和声」である。和声指導のために、中学年までの合唱経験を基にして、2部合唱をまとめ、和声の流れの中で多声部を聴きながら、音の重なりや和声の響きを感じ取らせる経験を数多く持たせることが大切である。

また、佐野（1999）は、「高学年の歌唱指導では、技能を高めるだけでなく、音楽的な内容を感じ取って表現することに関心を持たせることも重要である」と述べている。高学年の合唱指導では、歌詞の表す内容を具体的な情景として思い浮かべたり、歌詞の中から表題にとって重要な言葉を見付け、その表現を工夫したりするなど、歌詞の内容を曲想表現に生かすようにすることが大切である。その際、言葉の抑揚、リズム、アクセント、語感などを大切に、気持ちを込めようとうようにすることが必要となる。進んで音楽に参加できるような児童が魅力と感じるような教材を用意し、題材のねらいに沿った教師の指導の工夫が求められるのである。

(1) 豊かな合唱をつくりあげる学習

これまで、私が実践していた合唱は、教師自身が、楽曲のイメージを児童に伝え、曲想表現を児童と創り上げてきた。それは、教師が単にイメージしたことを児童に伝え、感覚的に想像しながら、創り上げていくだけの合唱指導だった。児童には、これまでの生活経験を踏まえたそれぞれの思いがあり、一人一人の想像する考えが様々である。個々の児童が考えた思いを友達と共有せず、一つの考えのみに固執して捉えてしまっていた。児童の多様な考えが、曲に生かされず教師の思いだけが先走っていたのである。

そこで、自分達の思いを込めて、よりよい合唱を創り上げていくために、児童に歌詞に対する思いを気付かせ、自分の気持ちを友達に伝えながら、さらに表現力へと結び付けていくことが大切であると考え。みんなの考えを、グループの友達同士で、練り合う事によって、歌詞のもつメッセージを話し合い、どんな気持ちで歌ったらよいのかを話し合っていく。児童が自らの考えを子ども達なりの表現で伝え合うことで、曲の良さに改めて気付きながら歌うと、児童の創り上げた曲想表現へと結び付くと考え。

(2) 音楽の内容を感じ取ることの指導

音楽表現の中で児童が創造的な活動を活発に行うことで、主体性や創造性を育成しようと、音楽的な感受を基に、表現方法を工夫することを内容として、小学校学習指導要領では、次のような項目が示されている。

- | |
|---|
| (2) 楽曲の気分や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。(低学年) |
| (3) 曲想や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。(中・高学年) |

高学年では、歌唱指導において、歌詞の内容や、諸要素によって構成される楽曲の特徴を生かして曲想を工夫し、豊かな表現をしようとする心を育てることが大切である。

そこで、以下に示すことに気を付けながら、曲想表現へと結びつけていくことが求められる。それらの相互のかかわりを大事にしながら、創意工夫のある学習を進めることが大切である。

- | |
|--|
| ① 作者の気持ちや主題を理解する。
歌詞の朗読を通して、作詞者の気持ちや主題を理解する。朗読して理解したことを発表し全員の共通理解のもとで歌唱表現ができるようにする。 |
| ② 音楽的な内容を感じ取る。
リズム・旋律・和声・調・速度・強弱などの要素や曲全体の気分を感じ取って表現する |
| ③ 和声の響きや変化を感じ取る。
伴奏や合唱などの和声の響きや変化を感覚的に捉えて表現する。 |

高学年における音楽の表現は、心の中の様々な思いや考えを、音を通して表現し、伝え合うことが大切だと考える。

(3) 児童の学び合いを通じた曲想表現を目指して

曲想表現を支えるのは、「曲の内容をどのようにとらえるか」「感じ取ったことをどのように表現するか」といった課題を果たすための工夫であると考え。そのために、学習の過程において、児童同士の学び合いの場面を設定し、自らの考えを友達に伝え合うことで、互いの思いを共有し、歌詞のイメージを子ども達なりに表現していくことを目指して学習を展開していきたい。さらにグループで話し合ったことを学級全体に広げ、学級合唱を通して一つの音楽を創り上げていくこと楽しさを味わわせていきたい。

さらに歌詞を通して、お互いの生活を見つめながら、豊かな心が育つよう感性を育てることによって、そこから、音楽性を形成されるものと考え。

5 評価について

音楽科の評価には、「音楽への関心・意欲・態度」「音楽的な感受や表現の工夫」「表現の技能」「鑑賞の能力」の4つの観点から捉えて評価していく。これらの4つの観点は、音楽科の表現及び鑑賞の活動全般にわたり、児童一人一人の学習状況を的確に把握し、指導に生かすための評価の窓口であるといえる。

北尾倫彦・伊藤俊彦「観点別学習状況の新評価基準表」(2004)

- | |
|--|
| 「音楽への関心・意欲・態度」…この観点は、児童一人一人が広く音楽に親しみ、意欲的に音楽活動を行うとともに、生涯にわたって音楽に親むようすることを重視したものである。 |
| 「音楽的な感受や表現の工夫」…この観点は、児童一人一人が音楽を聴いてそのよさや美しさを感じ取り、その過程で培ったものを工夫して表現していく能力や態度を育成することを重視したものである。 |
| 「表現の能力」…この観点は、児童が音楽表現を高めていくうえで必要となる様々な技能を育成することを重視したものである。 |
| 「鑑賞の能力」…この観点は、音楽を楽しくしかも積極的に聴取、鑑賞し、音楽のよさや美しさを味わう児童の育成を重視したものである。 |

(1) 題材の評価方法とその進め方

評価の具体的な方法としては、「行動観察」「学習カード」「演奏発表」「作品発表」「実技検査」「質問紙」「対話・会話」がある。評価資料を収集するための方法として次のような活用の仕方が上げられる。

評価資料を収集するための方法等 (伊藤俊彦「小学校音楽科全学年主要題材の絶対評価」2003)

評価の方法	評価の内容及び評価の活用の仕方など
○観察による方法	・子どもの表情、発言や行動をよく観察し、子ども一人一人のよさや特徴などを簡単にメモしておく。このことから、次の指導で何が必要かを判断したり指導に改善を加えたりすることができる。
○演奏や作品発表による方法	・子どもの学習過程や学習発表の状況を、演奏技能や即興表現の能力として評価する。また、子どもが作成した五線楽譜や音楽づくりの図形楽譜（設計図を含む）などを通して、創作の能力や音楽活動への関心・意欲・態度などを把握することができる。
○種々の学習カードを利用する方法	・子どもが立てた学習計画や学習後の記録（反省）カード、また、ワークシートなどを分析・整理し、子ども一人一人に対する指導に生かすことができる。
○質問やアンケート調査による方法	・学習の前や学習後に質問紙やアンケート調査を行い、子ども自身が学習内容や学習状況に気付くようにする。このことから意欲的で深まりのある学習活動を期待することができる。
○直接の対話や会話による方法	・日常の教育活動の場において、音楽活動への興味・関心・意欲や態度などを教師と子ども、あるいは子ども同士の対話や会話などから継続的に把握し評価の材料とする。このことから、学習の意欲付けや学習の雰囲気づくりに役立てることができる。

この評価方法は、1時間の中で、「どのような観点で」「何を」「いつ」「どのようにして」といった評価計画や評価内容を押さえることが大切である。題材のねらいをしっかりと把握した上で、指導過程において、具体的な評価計画を立てることが望ましい。

また、評価には、児童自身や児童相互が行う「自己評価法・相互評価法」といった方法もある。

「自己評価法」は、自分が音楽に対してどのような「関心・意欲・態度」をもっているのかを自ら問うてみることで、教師の目の届かないところで児童の気持ちや学習に対する考えなどを知ることができ、評価資料として役立たせることもできる。「相互評価」は、教育評価は、教育目標の達成状況を把握し、その後の教育活動を軌道修正したり、指導計画の改善を図る目的がある。

(2) ステップごとの活動とチェックポイント

子どもの学習状況を的確に把握するために、授業には、その時間全体を通して達成すべき目標と、そこに至る各ステップごとに配列された目標がある。教師は、指導過程で、その場の状況を見極め、子どもの意欲を高めながら活動に取り組みせなければならぬ。

そこで、下記に「ステップごとの活動とチェックポイント」を考察し、学習活動の流れを計画してみた。一人一人を実態を把握するためにも、様々な場面において、学習活動の目標を達成するための学習の過程を評価していく必要があると考える。具体的な目標が達成できない「C」と判断される子どもへの支援としては、ステップごとの活動で、目標達成に向けての支援の仕方を工夫することが大切である。

例えば、音楽への関心・意欲・態度を評価するにあたり、初めて目にした楽譜に関心を示し、情報を読み取って音楽の特徴に気付こうとする意欲を、つぶやきや発言、学習カードへの記入の様子などを行動観察し評価しながら、プラス面を評価していく。楽譜を読み取ることに慣れていない児童は、リズム読みをしたり音符カードを見せたりしながら楽譜への興味を向けるようにし、思い付いたことを認め励ましていきながら、学習カードに記入できるようにしていく。

このように、子ども一人一人の学習状況を音楽科の目標に照らしながら、各題材ごとの目標及び内容（教材）をしっかりと分析し、それに見合った評価の計画を明確にしなが、その結果を通して、次の学習内容に対して、子どもたちがどのように意欲付けをしていくことができるのかを判断しながら、授業計画を改善していくための教師自身の指導に対する評価でもある。

●「ビューティフルハート」授業での実践例

(合唱練習の流れに添った各ステップごとの活動とチェックポイント)

活動の流れ	活動の内容と評価
<pre> graph TD S((S)) --> A1[斉唱 (1番)] A1 --> CH1{CH①} CH1 --> A2[斉唱 (2番-S)] CH1 --> A1 A2 --> A3[斉唱 (2番-A)] A3 --> CH2{CH②} CH2 --> A4[合唱 (2番)] CH2 --> A3 A4 --> CH3{CH③} CH3 --> A5[斉唱 (3番-S)] CH3 --> A4 A5 --> CH4{CH④} CH4 --> A6[斉唱 (Coda-S)] CH4 --> A5 A6 --> A7[斉唱 (Coda-A)] A7 --> CH5{CH⑤} CH5 --> A8[合唱 (全) 録音] CH5 --> A7 A8 --> CH6{CH⑥} CH6 --> A9[合唱 (全)] CH6 --> A8 A9 --> E((E)) </pre>	<ol style="list-style-type: none"> 1 1番を斉唱で歌う。 ○教師は1回歌うごとにその状況を判断し（CH①）、2番に進むかを決定する。 ※2番、3番でも歌う旋律なので不十分な点があってもよい。 2 2番の合唱練習をする。 ○ソプラノパートを歌うかは、CH①での判断で決定する。（主旋律） ○アルトパートを1回歌うがその状況を判断し、（CH②）、合唱するかを決定する。（副旋律なので） ○合唱ができるようになったことを確認し、（CH③）次に進む。 ※3番でも同じ旋律が繰り返し出てくるので、不十分な点があってもよい。 3 3番の合唱練習をする。 ○発音練習を意識した口形作り。 ○合唱ができるようになったことを確認し、（CH④）、次に進む。 ○最後のCodaの音程を確認する。 ○アルトパートのCodaの部分は、低くなるので、手を使って音程の確認を行う。（CH⑤） 4 活動のまとめとして1番から3番Codaまでを通して合唱する。 ○歌詞の意味を考え、気持ちを込めて表現しながら合唱する。 5 合唱を録音して聴き、さらに曲想表現を練り合う。 ○自分達の演奏を客観的に聴くことで、よりよい合唱に仕上げてまとめていく。（CH⑥）自己評価 <p>※（1-）は1番を示す。同様に（2-）は2番（3-）を示し、同様に（-S）は、ソプラノパート（-A）はアルトパートを示す。</p>

Ⅷ 実践研究

1 検証授業指導案

- ・日時：平成20年 7月2日（水）6校時
- ・対象：宮古島市立南小学校 5年1組 計39名

(1) 題材名 『すてきなハーモニー』

(2) 題材の目標

- 声や音が重なり合う響きを感じ取って表情豊かに歌ったり、演奏したりすることができるようにする。
- 重なり合う各々の旋律の特徴を感じ取って演奏の仕方を工夫することができるようにする。

(3) 題材について

① 題材観

この題材は、合唱や合奏でハーモニーを創り出したり、オーケストラの演奏形態による演奏や混声4部合唱曲を音楽鑑賞したりして、和声の響きを味わうとともに、ハ長調とイ短調の曲の感じや音階の違い、また、ハ長調の主な和音（I IV V V7）などについても学習することをねらいとしている。

これまで児童は、低学年から、斉唱・交互唱・分担唱・輪唱・部分2部合唱と、歌唱経験を積み重ねてきた。高学年では、これまでの合唱経験をもとにして、和声の流れの中で、他声部を聴きながら、音の重なり合いや和声の響きを感じ取らせる経験を数多く持たせることが大切になる。

この題材を通して、リコーダーの2重奏や2部合唱など多様な表現形態を経験し、児童一人一人の演奏技能の習得を図り、児童が創造的に音楽にかかわる活動を活発に行う学習を工夫することで、みんなで楽しく声を合わせる活動から和声の響きを意識して演奏する活動へと結びつけていく。

新しい学年を迎えた児童にとって、一つのことをみんなで創り上げる喜びを味わわせることは、新しい友達との輪を深め、互いのよさを認め合いながら音楽の楽しさを共有していくことにつながっていくと考える。

② 教材観（「ビューテフルハート」作詞：名村宏、作曲：坪熊克裕）

この曲は、ハ長調 4分の4拍子でA、B、C（手拍子も含む）D（C o d a）の楽曲構成による1～3番までの歌詞の曲である。Aの部分は、斉唱で、Bから3部に分かれ、C o d aの部分では、4部の和声で編成されている。

また、曲のテンポもリズムカルで歌詞がメロディーにのせて歌いやすく、歌詞も「きれいな心」「やさしい心」「ゆたかな心」を取り上げながら、「みんな仲良くしよう」というメッセージが込められた曲である。歌い出しを斉唱で扱うことによって、みんなの心を一つにまとめながら、中間部分のB、Cにおいて、合唱へとつなげた曲である。

もともと、3部合唱での扱いだが、合唱経験の少ない児童のため、児童の声域に合わせ、ソプラノとアルトのパートの2部にして、学習を進めていく。アルトパートを選んだのは、4度の音程で構成されているため、比較的声域の狭い児童でも、無理なく歌える音の範囲であると考えたからである。

③ 児童観

本学級は、明るく男女仲のよいクラスで、音楽鑑賞をグループで行う際にも、お互いの意見を出し合いながら、思ったことを相手に伝え、考えを深めることができる。また、ペア学習を通して、二人一組となり、音楽的活動を行う際にも、恥ずかしがらずに男女仲良く活動できる学級である。

さらに、既習曲「ビューティフル サンデー」では、身体表現を取り入れた音楽活動であったが、恥ずかしがることなく、踊りながら歌うことができた。授業以外の音楽としては、ピアノを習っている児童は2名、マーチングの部活動に所属している児童は5名いるが、初心者がほとんどであり、全体的に音楽活動経験の少ないクラスである。

検証授業の前に、児童の音楽の学習に関する意識調査を行った。(資料参照) 本学級は、音楽が好き・やや好きと答えている児童は、18名おり、中でも、歌うことは、約6割近い児童が好んでいる。歌うことが嫌い・やや嫌いと答えた児童は、自分の声は、「低いから」「がらがるから」など、自分の声に対して自信を持っていない児童がいることが分かり、変声期の初期と思われる児童も4名いることが分かった。

また、アンケートの児童の声と実際の児童の声質を比較し、実態把握を行うために「声域調査」をし、個々の実態把握としながら、パート分けや児童の合唱隊形の並び方など、グループ編成にも役立てることが出来た。数回しか児童との関わりをもてなかったが、この調査を行うことで、自分の声は、低いと思っている児童も、ピアノを通してどんどん移調しながら、「おなかの体操」を歌わせると、児童が思っている以上に声の出る児童もいることが分かった。

④ 指導観

本題材は、「すてきなハーモニー」の中の合唱を表現活動として扱い、2部合唱を通して、声の重なり合いを味わう学習である。そこで、児童の身近な生活の中から、様々な場面を歌詞から想像し、曲のイメージを子ども達で創り上げていく活動を学ばせたい。

また、1曲ごとに発声のめあてをもった発声曲を児童に与え、発声曲を用いた発声指導に取り組んでいく。

高学年になると、心身ともに発達し、早い子では、「変声期」の前兆傾向に思われる児童もいるため、変声期前の児童に声域に無理のないような楽曲を選び、中音域や低音域の音の動きに興味を持てるような児童が生き生きと活動できる教材の選択も工夫し、合唱へ無理なく参加できるよう指導を進めていきたい。

さらに、教師主導型のような歌唱指導の学習ではなく、児童が自らの学びを成立させていく過程を重視し、ペア学習やグループ学習を取り入れ、友達との関わり合いを大切にしながら、子どもたちの学び合いができるような授業改善を進めていきたい。

そこで、話し合い活動がグループで滞っている児童に対しては、歌詞のもつ言葉を意識しながら歌えるような発問を工夫し、児童達に練り合いをさせていきたい。

そして、児童のつぶやきや意見をグループに広げ、授業の内容の確認や焦点化、共有化などを図り、児童の言葉で授業を創っていく授業展開を仕組んでいきたい。そうすることで一人一人の児童が意欲的に学習活動に参加し、生き生きと歌を歌う児童の育成にもつながると考える。

(4) 指導計画・仮説の検証計画 (全14時間 本時 13/14時間)

次時	学 習 内 容	□本時の目標	■仮説の検証
第1次	○オーケストラの響きを味わおう。 教材名：【鑑賞】「ハンガリー舞曲第5番」		
第5	○短調の響きを味わおう		

二 次		教材名：「日ぐれのハーモニカ」 「モルモット」
第 三 次	2	○音の重なりを聴きながら演奏しよう 教材名：「こきょうの人々」
第 四 次	1	○大人の声の響きを味わおう 教材名：【鑑賞】「滝 廉太郎の歌曲 3曲」
第 五 次	5	○声の重なりを聴きながら合唱しよう 教材名：「ビューティフルハート」
		①演奏を聴いて曲の感じをつかみ、主旋律を視唱する。また、手拍子のリズムも覚え、Cの部分で手拍子も入れて歌う。 □楽曲のよさに気付き、自分の声に自信をもって歌う。 ■仮説1 ① ②
		②副旋律の音取りをし、2部合唱の練習をする。 ・低音部の4度の音程を意識しながら2部合唱の練習をする。 □お互いの声を聴き合い、合唱をする。 ■仮説1 ① ② ■仮説2 ③
		③「ビューティフルハート」の歌詞の言葉を相手に伝えるように子音の発音を意識して2部合唱を練習する。 □お互いの声を聴きながら、言葉の発音に気を付け、曲想表現を工夫する。 ■仮説1 ① ■仮説2 ③
		④表現の工夫をしながら、2部合唱をする。 (発音・発声・口形など) (本時) □お互いの声を聴きながら、曲想表現を工夫し、自分たちの思いをこめた2部合唱をしよう。 ■仮説1 ① ② ■仮説2 ④
		⑤曲想表現を生かしながら2部合唱のまとめをする。 □お互いの気持ちを練り合いながら、曲想表現を工夫し2部合唱をしよう。 ■仮説1 ① ■仮説2 ③ ④

(5) 本時の展開 (13/14)

① 本時の目標

- ・自分の声に自信をもって合唱に取り組み、曲想表現を練り合いながら2部合唱をする。

② 授業仮説の検証の視点と方法

	検証の視点	場面と方法
検 証 (1)	①自分の声に自信がもてたか。 ②楽曲のよさに気付き、生き生きと歌うことができたか。	・児童の観察 (表情・態度) ・ワークシートの活用 ・自己評価 (児童)
検 証 (2)	④曲想表現を練り合うことができたか。	・映像での記録

③ 授業仮説

- ア 発声指導で、自分の声に自信をもたせるとともに、表現の工夫を考えさせることによって、

楽曲の理解を深めさせれば、歌いたいという意欲をもつであろう。

イ 学習の場を工夫し、お互いの声を聴き合ったり、曲想表現を練り合ったりさせることにより、合唱をする楽しさを味わうことができるであろう。

④ 準備

拡大楽譜、発音を意識する歌詞カード、発声のイラスト図、発声のドリル集、ワークシート、発表を表示するカード、キーボード、オルガン

⑤ 本時の展開

過程	学 習 活 動 ◇発問の工夫	教師の支援・留意点	検証の視点
導入	1 「ヒップアップホッペアップ」「くちびるたいそう」 「発声のドリル（3）を歌い、声出しをする。	・発声曲のそれぞれのめあてを確認して歌わせることにより、発声の技能を向上させる意欲を持たせる。	■検証1 ①自分の声に自信をもって合唱することができたか。 ◇観察…歌唱の注意点を意識しながら歌っているか。
10分	2 「ビューティフルハート」を2部合唱で歌う。 (一斉指導)	・自分のパートの音程や言葉をしっかりと歌うことを確かめながら舞台に立ち、2部合唱させる。	
	◇これまで、合唱の練習をしてきたことを思い出しながら、「ビューティフルハート」を合唱してみよう。		
	3 今日の学習のめあてを確かめる。 (めあて)	・目標を提示し、学習のめあてを確かめさせる。	
	歌詞の言葉に気持ちを表す工夫をしよう		
	◇この曲は、どんな気持ちで歌ったらいいと思いますか。		
	[予想される児童の反応]		
	①「つらいときにもえがおがある」の部分では、明るい気持ちで歌う。 ②仲良しの友達を思って、励まし合うようなやさしい気持ちで歌う。 ③同じ夢に向かって進む仲間を大事に思う気持ちをこめて歌う。		
展開	4 グループで曲想表現について話し合い、練り合いながら曲の表現をまとめる。	・グループごとにワークシートに自分達の考えを書き込み、それぞれの思いを表現できるようにする。 (準備) ワークシートを配布	■検証2 ④曲想表現を練り合うことができたか。 ◇観察・ワークシート・VTR(録音)…積極的に話し合いをしているか。
25分	◇グループに分かれて、今日は、歌詞を人に伝える時の気持ちについてグループで話し合ひましょう。		

分	<p>5 グループごとに自分達の考えを発表する。</p> <p>①グループ（10人） ②グループ（10人） ③グループ（10人） ④グループ（9人）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで話し合ったことをカードに書かせ、自分達の考えを発表させる。 ・友達の考えを聞き、感想を発表し合い、目標の共有化を図る。 ・同じ曲でも、それぞれ曲をイメージする気持ちが違うことをに気付かせる。 	
<p>◇それぞれのグループの発表を聞き、この曲は、どんな気持ちで歌った方が、曲のイメージがわくのかをまとめよう。</p>			
<p>[予想される児童の反応]</p> <p>①一つ一つの言葉に気持ちをこめていねいに歌う。 ②友達とのいろいろな思い出を思い出して歌う。 ③人の心を大切に歌う。</p>			
ま と	<p>7 学習したことをワークシートにまとめる。</p> <p>6 全員で「ビューティフルハート」を2部合唱する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の学習に対する自分を振り返らせ、自己評価をさせる。 ・教室の舞台に並び、指揮者・伴奏に合わせて気持ちをこめて2部合唱する。 	<p>■検証3</p> <p>②楽曲のよさに気付き生き生きと歌うことが出来たか。</p>
め	<p>◇今日のグループ練習の成果を出して、全員で2部合唱に挑戦してみよう。</p>		<p>◇観察…気持ちをこめて歌おうとしているか。</p>
10	<p>◇最初の合唱と今、歌った合唱と比べて、どんなところがよかったと思いますか。</p>		
分	<p>[予想される児童の反応]</p> <p>①一つ一つの言葉をはっきり歌っていた。 ②息をそろえて、みんなの気持ちを一つにして歌っていた。 ③いろんな「こころ」をイメージして歌うことができた。</p>		
	<p>8 次時の予告をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次は学級全体で表現の工夫をすることを伝える。 	

2 授業仮説の検証

(1) 授業仮説①の検証

検証の視点：自分の声に自信をもって歌うことができたか。

自分の声に自信を持って歌う子どもを育成するために発声曲を通して歌う時に意識することを確認しながら、歌うことが出来た。それは、発声曲が児童に歌いやすく、歌詞から、発声を意識して、親しみながら楽しんで歌わせたり、発声のイラスト図を用いて児童に立って歌う時の姿勢、座って歌う時の姿勢も考えて歌うことが出来たからだと考える。また、変声を迎えた子もいるが、自分の声の出る音域で、一生懸命歌おうとする姿が見られた。



発声時の児童の写真

児童の感想と参観者の評価

〔児童の感想〕	〔参観者の評価〕
<p>○楽しかった</p> <p>○みんなで楽しくできて嬉しかった。</p> <p>○今日は、いっぱいの人が来て、ちょっとはずかしかったけど、いつもよりいい声が出てよかったです。</p> <p>○最初歌うのがはずかしかったけど、歌うたびに上手に歌えた。自分が、こんなにがんばれたんだなと思いました。</p> <p>○すごく良い気持ちだった。</p> <p>○思ったより上手く歌えた。</p>	<p>○少し音が外れていても、自己アピールして、歌っている姿がよい。(一人一人堂々と声を出していたのが良い)</p> <p>○導入時の発声指導で子どもたちが“生き生きと歌っている”様子が伺えた。音楽って楽しいなあと感じました。姿勢もよかったです。指揮者をしっかり信頼して見ていたように思います。</p> <p>○表情豊かに自信を持って歌っていた。</p> <p>○楽しそうに元気よく歌っていた。(楽しい曲で、楽しく発声できたと思うので)自信の表れだと思う。</p>

【考察】

児童の感想から、意欲的に学習活動に参加して歌ったことが分かった。また、参観者の評価からも、導入で扱った発声指導で、生き生きと歌っている様子や自信をもって歌っている様子を捉えることができた。

歌うことに対する心構えなどが身に付き、意識しながら姿勢や顔の表情などを考え、取り組むことができた。

このことから、仮説①の検証は、達成できたと考える。



発声曲を歌っている児童の様子

(2) 授業仮説④の検証

検証の視点：曲想表現を練り合うことができたか。

児童は、歌詞の内容把握の場面で、1番の「きれいな心」2番の「やさしい心」3番の「ゆたかな心」をグループ学習で考えさせ、自分の思いを相手に伝えることで、グループみんなの気持ちを共有化させながら、一体となって合唱表現へと結び付けていくことを学んできた。本時は、話し合い活動の場面は、初めてであったが、それぞれのグルー



話し合いの様子場面

プで司会者を決め、話し合いをリードしながら、活動することができた。

子ども達なりに、それぞれの考えを出し合い、意見をまとめ、グループでのまとまった考えをハート型のカードに書き、「やさしい心」は、「自分が相手に励ましているような気持ちで歌い、また、歌う時に工夫することは、だれかにやさしくしているように歌う。」などと発表することができた。

児童は、友達の考えを聞き合うことで、自分の身近な生活を振り返り、自分にも同じような経験を想起させ、自分の体験として深く考えることができた。



発表の様子の場面

児童の感想と参観者の評価

[児童の感想]	[参観者の評価]
<ul style="list-style-type: none"> ○「やさしい心」は、励ましているような気持ちで、やさしく歌う。 ○「やさしい心」は、自分がいじめられている所を友達が助けてくれたことを思い出して歌う。 ○「やさしい心」は、人にやさしい心を伝えるようにきれいに歌う。 ○「ゆたかな心」は、やさしい心で歌う。 ○「きれいな心」は、人に話しかけるように歌った方がいい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子ども達の話し合いが、子ども達なりに活発だったことがすばらしい。練り合いを通すことで、歌詞の意味を改めて考えよう、味わおうとする姿が見られた。 ○熱心に話し合いに参加し、自分なりに表現できていたと思う。 ○自分自身が発表した分、前向きに努力している姿が見られた。教師の問いかけに自信をもって手を挙げていた。 ○詩の練り合いと曲想表現の練り合いに話し合いで気付かされました。練り合いは、必ずしも言葉の中での練り合いだけでなく、音楽を聴いたり、表現したり、いろんなパターンの練り合いができそうだなと思いました。

【考察】

グループでの曲想表現について、練り合いながらどんなふうに歌ったら気持ちを込めて歌えるのかについて話し合ったが、観察法によると、どの児童もそれぞれの意見を出し合いながら、話し合い活動を行うことが出来た。

話しの切り出しに詰まる部分も合ったので、司会を担当する児童に「話し合いの進め方」のヒントカードを与え、話し合いの流れを進めていくように指導した。その結果、日頃の体験と照らし合わせながら、これまでの自分を振り返り、それぞれがイメージしたことを発表することが出来た。

児童がグループ内の友達に対して、意見を伝え合うことができたり、学級全体に自分の考えを伝えることができたことから、仮説④の検証は、達成できたものとする。



練り合いの場面の様子

(3) 授業仮説②の検証

検証の視点：楽曲のよさに気づき、生き生きと歌うことが出来たか。



最後の2部合唱の場面

この場面では、学習のまとめとして、児童が、曲想表現を練り上げたことを生かして、歌詞の内容「きれいな心」「やさしい心」「ゆたかな心」は、それぞれ、どんな気持ちなのだろうかを日頃の子どもの生活経験の場面から思い出させ、歌詞に気持ちを込めて歌る

ようにイメージを持たせて表現しながら、2部合唱を行った。

児童は、1回目の導入時に歌った時よりも、それぞれの歌詞に自分の思いを込めて、歌詞を丁寧に味わいながら歌っているように、児童の歌うの表情態度から伺えた。曲のタイトル「ビューティフルハート」を考えることで、楽曲のもつ作詞家のメッセージを子ども達なりに捉え友達を思いやる優しさを想像しながら、歌うことができた。

児童の感想と参観者の評価

[児童の感想]	[参観者の評価]
<ul style="list-style-type: none"> ○『ビューティフルハート』をもっと感情をこめて歌うには、自分の思っていることを想像して歌えばいいんだと思いました。 ○たくさんの先生達の前で歌うのは、恥ずかしかったけど、最後はきれいに歌えました。 ○2番のやさしい心がやさしく歌えた。 ○いつもより、やさしい気持ちで歌えたと思った。 ○すごく良い気持ちだった。 ○自分がこんなにがんばれたんだなあと思いました。 ○いつもより良い声で歌えてよかったです。 ○1回目より2回目が歌えました。 	<ul style="list-style-type: none"> ○2回目は歌う表情も歌声も変化し、良くなっていた。 ○歌うことを楽しんでいる。音のまとまりを意識している。 ○みんなでグループで話して、最後の合唱では良かった。 ○それぞれの“きれい”“やさしい”“ゆたか”がそれぞれにあったのではないかと。ただ、話し合いの多くの部分？では、もっと簡略化できるとテンポのよい学び合いができたのではと思いました。確かに2回目は、よくなりましたね！

話し合ったグループの児童の意見



話し合ったことを発表

3番の「ゆたかな心」について話し合いました。私たちは、やさしい気持ちで歌います。友達が泣いている時に、「大丈夫？」って言って励ましてくれるようにイメージしながら歌いたいです。

【考察】

学習を生かして、歌詞の中の意味を自分達なりに考え、どんな気持ちで歌ったらよいかをグループで話し合い、曲に込められた作詞家の思いを自分たちで気付きながら、合唱に生かしていくことに取り組む学習である。児童は、歌詞の中の「きれいな心」や「やさしい心」「ゆたかな心」を取り上げ、これまでの優しくされたことのある経験を思い出し、その時の気持ちになって一人一人の様々な思いを曲の中で表現し、気持ちを込めながら歌うことが出来た。楽曲

の強弱記号から曲想表現を理解するのではなく、歌詞の中から子供達なりにいろんな気持ちを想像させ、その思いが自然に表現力へと結びついていったように感じられた。

また、児童の自己評価からも、「多くの先生方の前で歌うのは、恥ずかしかったけど、いつもより良い声が出た」とか、「緊張したけど、一生懸命頑張れたのでよかった」などと、子ども達なりに頑張っていて歌っていたことが分かった。

このように、児童の歌うの表情や参観者の評価からも、1回目と2回目とでは、気持ちの込め方が違っていったことから、子ども達の合唱の表現も工夫され、仮説②の検証は、達成したと考えられる。

Ⅸ 研究のまとめ

1 研究仮説(1)の検証

発声指導で、自分の声に自信をもたせるとともに、表現の工夫によって、楽曲の理解を深めさせれば、歌いたいという意欲をもつだろう。

(1) 自分の声に自信がもてたか

① 実践と結果

ア 実際に声が出る時の身体の中がどうなっているのかをDVD『声の不思議』で、児童に見せ、音声生理学のしくみを視覚的に学ぶことで、声が出た時の声帯や声門の様子を理解させた。

児童のワークシートから児童の感想

- 声帯についてのDVDを見て、いろいろ知ったことがあります。のどの奥は、開いたり、閉まったりすることです。最初見たときは、「気持ち悪い」と思ったけど、話しを聞いていると「のどや声はすごいな！」と思えるようになりました。
- 声門が開いたり、閉じたりして気持ち悪かったけど、それできれいな声が出るんだったら、この声門を使ってきれいな声を出したいです。
- 「声の不思議」を見て、ぼく達の声が、こんな声を出しているとDVDで出ていてびっくりしました。
- 自分ののどが、こんな仕組みだと知らなかったのも、とても楽しかったです。また、これから自分の声をもっときれいにしたいです。
- 初めて見たので、すごいと思った。人は、いろいろな仕組みになっていたことが分かった。
- 歌を歌うと、のどがあんなふうになんて、思いもしませんでした。
- 初めて、声帯の声門があると知ったので、今からも、でっかい声を出したい。
- 初めて、声帯を見て、人はこれで声を出していることを知っておどろいた。

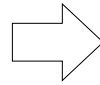
イ 発声ドリル集を活用した発声練習を行った。

「おなかの体操」「くちびるたいそう」「ヒップアップ ホッペアップ」「発声のドリル(1)～(3)」の6曲の発声曲を歌い、自分の声に自信をもって、発声の技能を高めながら歌った。初めて発声曲を歌った児童だったが、みんな一生懸命歌詞を覚えて歌おうとする意欲が感じられた。

最初は、曲を覚えることに精一杯だった児童も、徐々に曲になれてくると、指揮者を見ながら、1曲1曲の発声練習で気を付けるポイントを意識して歌えるようになっていった。



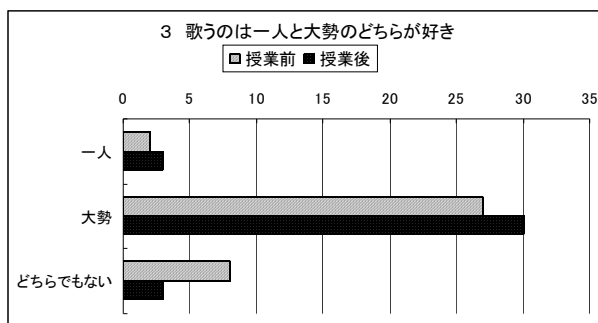
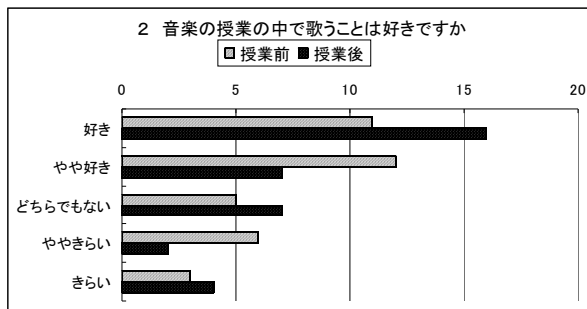
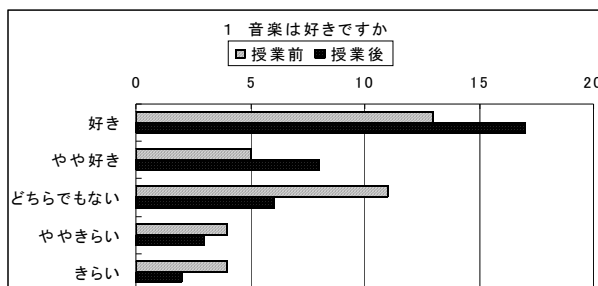
初めて発声曲で、歌詞を覚えながら歌っている様子



指揮者を見て口を大きく開いて歌う児童の様子

② 考察

児童のアンケートより



検証前は、音楽の授業の中で歌うことは好きと答えている児童は、11名だったが、検証後は、16名に増え、歌唱活動を好む児童が増えてきた。また、歌うのは、一人よりも大勢で歌う合唱を好む児童が多く、検証授業を通して、合唱の楽しさを味わうことができたと思う。自分の声は、どのように体の中で出しているのかを視覚的に理解することによって、自分の身体に興味を持ち、声を出そうとする意欲が徐々に見られた。

そこで、発声練習で、「おなかの体操」を覚え、半音階で、どんどん自分の声域を広げながら、高い声も出せるようになり、自分が思っている以上に高音域も発声を生かしながら、歌うことができた。また、同じように、低い音も、半音階で移調しながらどんどん低く歌うことで、音域に広がりをもって歌うことが出来た。事前の調査により、変声を迎え、どうしても高い声が出しづらい児童には、1オクターブ低く歌わせることで、少し自信をもって活動に参加することが出来るようになった。

「くちびるたいそう」では、唇や舌を使った発音練習を取り上げ、歌唱の言葉をはっきりと歌うための工夫を行った。「ヒップアップ ホッペアップ」では、歌う時の姿勢について、歌詞からイメージし、口形

を意識しながら縦や横に広げて、顔の表情も意識させてみた。このように、発声練習で、自分の声に自信をもつことにより、学習活動にも積極的に参加し、6曲もの発声曲を自ら覚え、生き生きと自分なりに歌うことができた。

アンケートの結果からも、音楽が好き・やや好きと答える児童が24名となり、そのうちの8名は、検証後に好き・やや好きに変わった児童であった。その理由も、楽しいから、歌うのが好

きだからなどと、徐々に歌うことに抵抗を感じることなく、いろいろな発声曲を覚え、楽しんで取り組むようになったと考える。

児童のアンケートや前述の公開授業の検証からも、研究仮説①の検証は達成したものと考える。



(2) 楽曲のよさに気づき、生き生きと歌うことが出来たか。

① 実践と結果

ア 第1時…「演奏を聴いて曲の感じをつかみ、主旋律を覚えよう」



グループでの練習

初めて「ビューティフルハート」の曲を聴き、主旋律を覚えようと9～10人ずつのグループに分かれて、音取りの練習をしました。変声期の子が一つのグループに偏らないようにグループ編成を工夫し、高音5名、低音5名のパートに分けたが、まずは、主旋律をしっかりと覚えるためにピアノまたは、オルガンやキーボードを使って練習をしました。四分休符（)やシンコペーションのリズム（)が、しっかりと取れるような部分では、手を打ち、休符を感じながら練習したりして、1拍のリズムを感じ

じ、楽譜をしっかりと見て歌えるように意識させた。

児童のワークシートより

「ビューティフルハート」を歌うとき、

グループで話し合ったこと

- 歌詞の中の“笑顔がある”のところを笑って歌う。
- ぶらぶらしないで歌う。
- えがおで楽しく歌う。
- 口を開いて歌う。



旋律の音取りをしている様子

イ 第2時…「演奏を聴いて曲の感じをつかみ、副旋律を覚えよう」

副旋律の音程をしっかりと音取りするために、4度音程が上下するところで、手を使って、音の高低を意識させてみた。手を使わずに歌った場合と、手を使って音程を意識した場合とでは、音の上がり下がりが、児童にははっきりと分かり、楽譜のあまり読めない児童でも、音の高さに気を付けるようになった。このように正しい音程を児童に視覚的に掴ませることで、副旋律の音程も歌えるようになってきた。

ウ 第3時…「歌詞の言葉を相手に伝えるように意識して、一つ一つの言葉に表情を付けながら歌おう」（子音の発音「カ行・サ行・タ行・ハ行・バ行」を意識した発音練習）

母音の口形の開け方を一つ一つ意識させ、母音の発音を生かして子音では、どのように発音したら、より言葉がはっきり伝わるのかを確認させるため、「発音カード」を使って、発音ごとに記号で示し、発音練習を行った。



発音練習の様子

② 考察

検証授業後、歌うことが好き・やや好きの児童が23名となり、特に好きの児童が16名に増えた。音程が取れてきたので、2部合唱の練習も行ったが、お互いのパートを聴きながら、つられないように頑張ろうとする気持が児童のワークシートからも分かり、子ども達が一生懸命2部合唱をしようとする意欲が感じられた。第1時で、グループ活動における主旋律のリズムの取り方を覚えるために、リズム打ちを取り入れ、1拍の4分休符の休みを感じることも、みんなの心を合わせながら、リズム指導を通して身体で覚えることにより、メロディーを素早く覚えることが出来た。

また、第2時では、副旋律の音程を取る時に、音の高低を手で示すことにより、楽譜を読み取るのに苦手意識のある児童でも、音の高低を手を使って理解し、音程を正しく覚えるのに効果的であった。

さらに、第3時では、歌詞を丁寧に発音するために、口形に気を付けながら、子音の発音を意識させ、気持ちを込めて歌詞を歌うには、発音の大切さを伝えることができ、歌詞の良さを子ども達に理解することができたと考える。このように、目的意識を持たせながら、1時間ごとの活動計画を立てることで、歌唱表現の学習意欲が高められたものと考えられる。

検証授業後の児童のアンケートからも、大勢で歌う方が楽しいと答える児童が増え、みんなで歌うことの楽しさが感じられたことが分かった。また、友達と一緒に活動することは好きと答える児童も、検証後は、23名にも増え、グループ活動を通して、学習活動を楽しく参加したことが伺えた。さらに、友達と活動する内容では、合唱が好きと答えた児童が、検証前と後とでは、5名も増え、23名の児童が、さまざまな音楽活動の中でも、合唱が楽しいと答えた。

以上から、研究仮説②の検証は達成したものと考えられる。

2 研究仮説（2）の検証

学習の場を工夫し、お互いの声を聴き合ったり、曲想表現を練り合ったりさせることにより、合唱をする楽しさを味わうことができるであろう。

(1) お互いの声を聴き合う学び合いから、合唱ができたか

① 実践と結果

ア 第2時…「お互いの音を聴き合いながら、2部合唱で歌ってみよう。」

「ビューティフルハート」の1番を1グループが、歌い良かった点を発表させる。他のグループは、どんな点が良い点であったのかを見つけながら、友達の発表を静かに聴く。Aくんが「♪つらいときにも～えがおがある」という歌詞の部分で、笑顔でにこにこしながら歌っていたことを取り上げ、ただ、歌うのではなく、顔の表情も豊かにして歌うと良いことに気付かせた。まだ、2時間目ということもあり、歌詞は、楽譜を見ながら歌っていたが、どの子もピアノ伴奏に合わせて、一生懸命歌っていた。



1グループの発表の様子

【児童のワークシートの感想より】

- 歌うと、気持ちがよくなった。
- つられないように頑張った。
- 楽しかった
- いろいろな声混ざって楽しかった。
- いろいろな声を出して楽しかった。また、やりた
いです。
- アルトパートは、低くて歌いやすかった。

【児童の感想発表より】

- Cの部分で、音程がつかれそうになっけ
ど、最後まで頑張った。
- 少しむずかしいけど、楽しかった。
- ソプラノにつられて、アルトの音を忘れて
しまった。次は、アルトパートの音を完全
に覚えたい。

イ 第3時…「自分と同じパートに分かれS・Aの順に「発音を意識する歌詞カード」を見ながらパートごとに分担唱で歌う。」

カ行・サ行・タ行・ハ行・バ行の5つの子音を取り上げ、唇や舌・軟口蓋などによって、美しい響きをもった声に変える発音練習を行った。子音をより美しく発音することで、遠くまで、歌詞の中の言葉がメロディーにのって届くことができる。それぞれの発音を意識させるため、カ行は△、サ行は○、タ行は◇、ハ行は□、バ行は◇の形で歌詞を記号で囲み、口形や息使いを工夫した。また、歌詞を覚えるために、拡大掲示用歌詞も用意しながら、自信をもって歌えるよう工夫した。(楽譜資料参照) このように、大事な言葉を丁寧に発音するように心がけることで、徐々に口も大きく開き、言葉の響きも考えながら歌えるようになってきた。呼吸も、大事な言葉を歌う前には、息を吸って歌うことを意識するようになった。



それぞれの発音を理解し、口形を意識した発音練習の場面

児童の感想より

- とても楽しかった。
- 前よりも上手く歌えた。
- ちょっと、むずかしかったけどできた。
- 今日は、みんなと一緒に歌ったりして、楽しかった。また、頑張りたいです。
- 腹筋も使えたりして、楽しかった。
- 「ビューティフルハート」を歌えるようになると音楽が楽しくなった。
- 楽しい合唱ができてよかった。

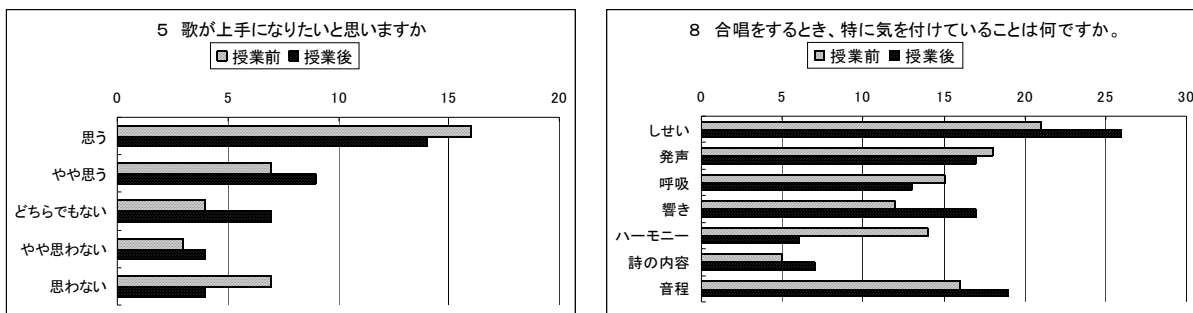
ウ 第5時…「前時に録音したテープを聴かせ、発音・音程・高音低音のバランスなど、自分たちの合唱をよりよくするために子ども達に自分達の声から気付かせる」

公開授業の最後に歌ったビデオ映像を見て、自分達の2部合唱がどのように歌っているのかを、調べることができた。ビデオから、思っている以上に口が開いていなかったの、「意識して口を開けて歌った」とか、「ソプラノとアルトのバランスが取れていないので、音程がつかれないように意識しながら歌った」などと、自分の反省点を意識して、合唱作りに向けて、子ども達が自主的に次の課題を持ちながら活動に取り組むことができた。実際に、自分達の歌っている表情や合唱を聴くことで、合唱を工夫しようとする意識が付き、学習意欲へと結びついていった。



公開授業時の最後の合唱風景

児童のアンケートより



自分達の演奏を聴いた児童の感想より

- 歌詞に書いてある事を思いながら歌った方が良い。
- 自分で歌っているよりも自分で聴いた方が悪いところがあった。
- 練習の時と違って、上手になっていた。
- 以外ときれいな声だったので、びっくりした。
- もうちょっと、姿勢を正しくしたらいいなと思いました。
- やさしい気持ちでいつもより、歌えた。
- 「ビューティフルハート」は、最初より良くなっていたので、もっと練習すれば他の歌も上手になると思った。
- 歌の途中で、ふらふらしていた時があったので、歌うときには、よそみをしないようにしたい。

② 考察

アンケートからも、合唱をする時に気を付けていることが、第1に姿勢、第2に音程、第3に発声と、子ども達の意識する点が増え、単に、楽譜を見ながら歌詞を歌うのではなく、歌う前の姿勢の重要性や発声などの練習の大切さを検証授業を通して理解することができたと考える。

第2時の「友達の声や歌い方を聴き、自分の歌声と比べ、友達の良いところを発見する。」ことから、お互いにコミュニケーションを取りながら、友達の良さを見付けることが出来た。

第3時では、発音を意識したカードを利用し、歌詞の良さを合唱表現に活かして、気持ちを込めて歌うことの大切さを感じながら歌うことが出来た。

このように、教材を工夫することや児童のアンケートから、検証③の仮説検証は、達成できたことが考えられる。

(2) 曲想を練り合うことができたか。

① 実践と結果

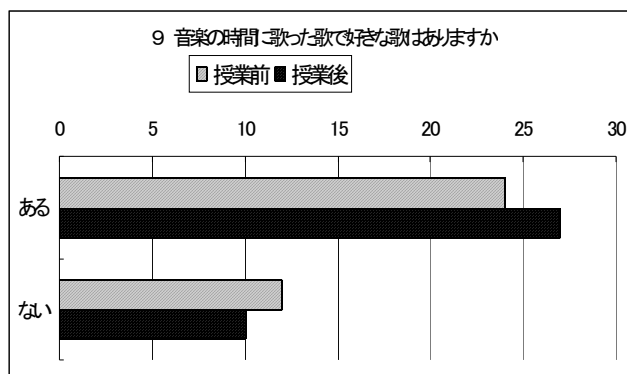
ア 第5時…「自分と同じパートに分かれS・Aの順に「拡大歌詞カード」を見ながらパートごとに分担唱で歌う」

自分達の歌っている姿勢・顔の表情・態度・口形・発音・音程・ハーモニー・高音低音のバランスなどを客観的にビデオを通して鑑賞することで、さらによりよい合唱を目指して、反省点を考えさせる。一人一人は、自分のそれぞれのパートを一生懸命歌っているが、他人から見られることによって、自分の欠点を修正することが可能になる。友達からのアドバイスを素直な気持ちで受け止め、自分の技能をさらに高めさせたい。

また、自分では、前時に話し合った気持ちを込めているつもりでも、友達の歌い方と比べることによって、こんなふうに歌うともっと、気持ちが込められそうだという、考え方に気付くこともできると考える。自己評価の視点を児童に伝えることで、さらによりよい歌唱表現へとつなげていくことが可能になる。自分の歌声に気を付けて歌うことや積極的に自己表

現を工夫させることにより、生き生きと歌うことが育成できると考える。

児童のアンケートより



② 考察

検証授業の第4時の検証で、曲想表現をグループ活動により、自分の考えをグループの友達に伝え、自分の思いをお互いに伝え合いながら練り合わせたり、グループから、学級全体へどのように、この曲のこの場面を歌ったらよいのかを話し合うことで、みんなで一つの合唱を創り上げることができたと考える。普段の生活場面を振り返りながら、歌詞のもつメッセージを子ども達なりに解釈し表現することで、共創のよさを感じることが出来たと考える。この学級のよさを生かしながら、合唱創りへと結び付け、合唱を通した一つの音楽として、音楽の楽しさを味わうことが出来れば、豊かな心の育成にも繋がるできると考える。

自分の考えを相手に伝えることは、普段からコミュニケーションを交わしながら、学級の雰囲気は何でも話せる態度が望まれるが、話し合いのルールを学び、話し合い活動に慣れるまでに時間が十分でなかった。そのため、何人かの児童は、自分の意見を自分の言葉でまとめ、グループ内の児童に十分に伝えることができなかった。少しずつでも自分の思いをグループ内の友達に伝えることで、みんなの考えを膨らませ、想像力を生かしながら、音楽性を高め合うことが出来ると考え、曲想表現に結び付けられるような曲の練り合いを深めさせる検証であったが、グループ内の数名の意見を聞き、うなずくのみの児童も見られた。

また、児童のアンケートから音楽の時間に歌った歌は、ありますかという問いに対し、あると答えた児童が検証後に増え、中でも検証授業で取り組んだ「ビューティフルハート」が好きと答える児童が多いことに、授業に意欲的に取り組んだことが実感できた。しかし、ないと答えた児童も10名いたことから、これらの児童への支援として、課題が残ったことになる。このことから、練り合いの場面をさらに工夫することで、自分の考えをもっと引き出しながら、学習に参加させる支援の工夫を捉えることができる。

以上のことから、研究仮説④は、十分に検証出来たとはいえないと考える。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- それぞれの目的に応じた発声練習を行わせることで、児童一人一人の歌唱技能を高め、自ら歌いたいと思う意欲を高め、進んで音楽活動に参加させることが出来た。
- 歌うときの正しい姿勢を意識させながら、自分の身体の声のでる仕組みを知らせることにより、よりよい声を求めながら音楽的活動をする態度が見えた。
- 歌詞の意味を自分なりに解釈し、友達に自分の考えを伝えながら、どんな気持ちで歌ったら良いのかを練り合うことが出来た。

(2) 課題

- 歌唱表現活動に消極的な児童への支援の仕方。
- 友達に自分の考えを伝えることのできない児童への支援の仕方。
- 年間指導計画の中に発声指導の基礎と歌詞の意味を深く考えさせる時間を効果的に位置付ける。

4 おわりに

本研究は、児童生徒の歌唱表現に対する歌う意欲が、低下していると思われる中で、生き生きと歌う意欲を育成するために、一人一人に歌いたいという意欲を持たせる工夫と、声の重なり合いを味わいながら、学び合いが実現できる合唱指導の工夫を通して、「1. 発声指導で、自分の声に自信を持たせるとともに、表現の工夫をさせることによって、楽曲の理解を深めさせれば、歌いたいという意欲を持つだろう」、「2. 学習の場を工夫し、お互いの声を聴き合ったり、曲想表現を練り合ったりさせることにより、合唱をする楽しさを味わうことができるであろう」という2つの研究仮説を基にしなが、実践研究を進めてきました。

一人一人の声質は、様々であるが、合唱は、それぞれの声の特徴を生かして、お互いの声の調和を取りながら、一つの音楽を創り上げていると思います。自分の声の特質を知ることで、自分の声に自信を持ち、生き生きと歌うことが出来ると考えます。歌うことを通して、児童のコミュニケーションを図り、個人の行動目標を自己評価し、さらに、グループや各パート内で他者評価を受けながら、集団活動での目標達成に向けての協力や話し合い活動を通して音楽表現を高めていけるように実践してきました。多くの児童は、歌う表現活動は、もともと好きで、児童の実態からも「歌が上手になりたい」という気持ちを持っています。

今回の検証の対象となった5年生も、伸び伸びと歌うことが好きです。これまで、あまり関わりが合うことが少ない児童でしたが、どの児童も、歌うことの楽しさを知り、合唱のよさを味わいながら、お互いのコミュニケーションを図れるような支援ができたという思いで、研究を実践してきました。また、これまでの生活体験を振り返ることで、歌詞からイメージを膨らませ、子ども達の音楽に関する感性を育て、豊かな心を育むことができるであろうと考え、友達との関わり合いを通して、また、自分の声を客観的に捉えることで、様々な発声練習にも取り組むことができたと思います。その結果、発声指導や歌詞の意味から気持ちを込めて表現することの大切さを児童なりに理解し、進んで学習に取り組むことが出来たと思います。

2部合唱の学習の進め方を工夫することで、児童同士のコミュニケーションを図りながら、意欲的に学習活動に参加し、歌うことを楽しいと感じられるような学習の進め方を検証授業を通して工夫してきました。児童一人一人に歌うときの目的をしっかりと把握させることで、児童の合唱することへの思考を広げ深めることができ、表現力が高まったと考えられます。このように、児童一人一人の実態を把握し、分析することで、児童に応じた発声法の対策を考え、様々な発声を取り上げながら、児童が自分の声に自信を持って歌うことが出来るように、これからも、指導していきたいと思ひます。

【主な参考文献・引用文献】

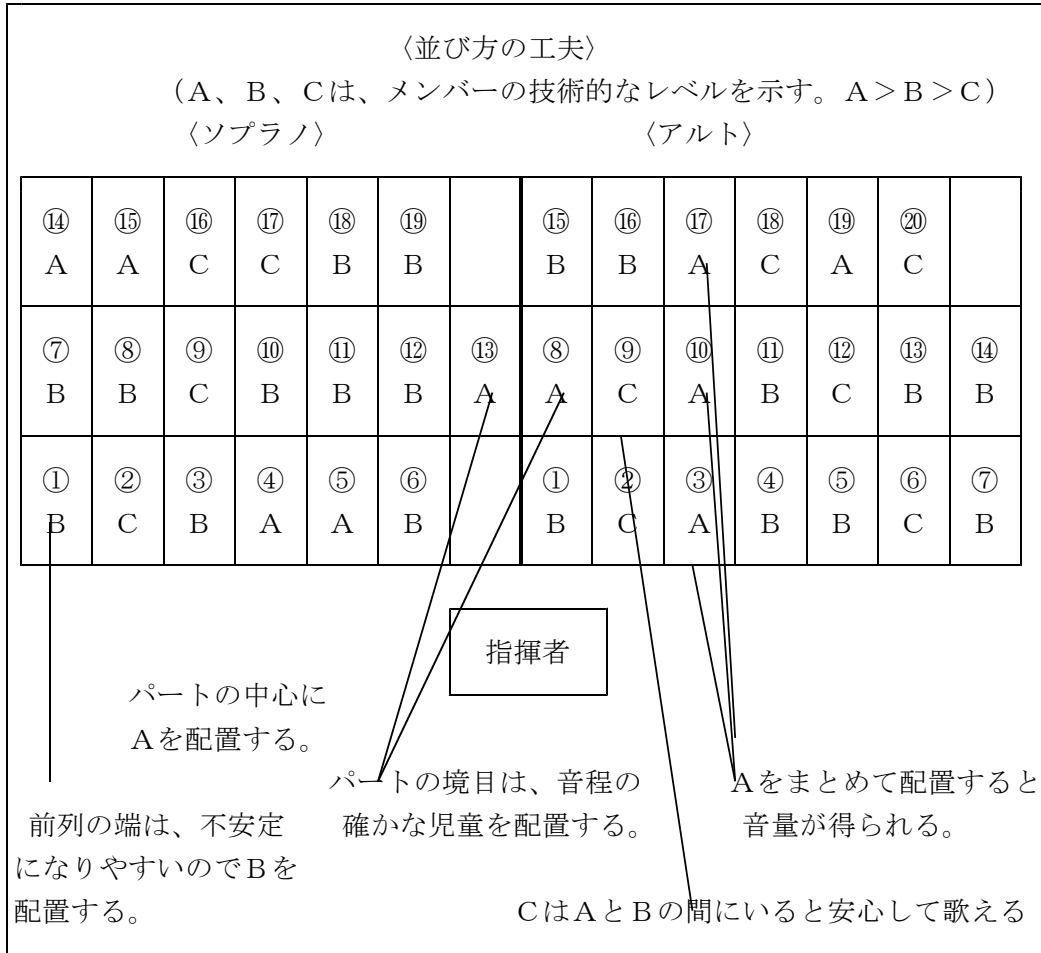
・文部省	『小学校学習指導要領解説 音楽編』	教育芸術社	2006
・上野 直樹	『5分間でいい声になる本 決定版』	青春出版社	2007
・上野 直樹	『5分間でいい声になる本 』		
・米山 文明	『声の不思議～美しい声を作るために～DVD』	音楽之友社	2007
・大金 桂子	『さすがといわせる合唱指導のポイント』	明治図書	2005
・北尾 倫彦・伊藤 俊彦	『観点別学習状況の新評価基準表』	図書文化	2004
・熊木 眞見子 中島 寿 高倉 弘光	『子どもの豊かさに培う共生・共創の学び』	東洋館出版社	2004
・竹内 秀夫	『イラストでみる合唱指導法』	教育出版	2004
・宮野 モモ子 丸山忠璋	『小学校新しい音楽科教育』	教育出版	2004
・伊藤 俊彦	『小学校音楽科 全学年主要題材の絶対評価』	明治図書	2003
・川池 聡	『小学校・中学校 新しい音楽科の指導と評価』	教育芸術社	2003
・金本 正武	『改訂 小学校学習指導要領の展開』	明治図書	1999
・橋本 静一	『小学生のヴォイス・トレーニング』	音楽之友社	1997
・福井 昭史	『授業の評価・音楽編』	音楽之友社	1997
・小原 光一	『新学習指導要領ガイドブック』	教育芸術社	1999
・呉竹 英一	『こうしてみたら楽しくなる 音楽の授業10のコツ』	草土文化	1996
・音楽科教育実践講座	『ソナーレSONARE』ゆたかな歌声編	日本文教社	1992
・井上 篤	『一人一人が生きる楽しい音楽学習』	愛媛県教育研究協議会	1987
・渡瀬 昌治	『教師のための合唱指導と実践』	音楽之友社	1983

資料

資料1 ステージでの並び方（メンバーの配置）

パートの配置だけでなく、パート内でのメンバーの配置の重要な合唱の効果が期待できると考えられます。

〈イラストでみる合唱指導法を参考に作成〉



並び方を決める方法の例として、下記に効果的な合唱のパート内でのメンバーの並び方を上げる。

- 1、ソプラノの中央④⑤にAを並べるのは、パートの中心的存在であるため、主旋律をしっかりと歌えるように配置する。また、後列にAを置くのは、後ろから声を聴いて歌いやすくするために配置した。
- 2、アルトの③⑩⑱とAが縦に並ぶのは、周辺の②⑨⑱のCがAを頼って正しい音程で歌えるように配置する。
- 3、前列の端は、不安を抱きやすい場所なので、B（またはA）を置き、音程が不安定にならないように配置する。
- 4、①と③の間の②にCを置くのは、両方の声を聴いて正しく音程を取れるように配置する。パートの境目にAやBを配置するのは、音程がつかれないように正確に取れることを条件とし、配置する。

このように、一人一人の技術的なレベルを的確に捉えることにより、音程があいまいな児童は、しっかりと歌える児童の側に配置したり、各パートのリーダー格の児童は、前列の中央付近に配置するなどの配置の工夫をしながら、合唱の並び方を工夫すると、効果的であると考えられる。

7月2日(水) 6校時

♪「ビューティフルハート」

～2部合唱に挑戦～



5年1組 番

名前()

☆今日の学習のめあて



歌詞の言葉に気持ちを表す工夫をしよう。



★「ビューティフルハート」を歌うとき、グループで話し合ったこと。

◇1番から3番までの歌詞の中で、何番のどんな「ところ」歌詞について話し合いましたか。

1番・・・「きれいなところ」 2番・・・「やさしいところ」 3番・・・「ゆたかなところ」

〈私たちのグループは〉

番

なところ

について話し合います。

*歌詞の中のこの部分は、○○のような気持ちで、こんなふうに歌うといいよ！

など・・・と、ふだんの生活の中から自分が経験したことを思い出して、グループの友達どうして、自分の考えを伝えていこう。



なところ をどんな気持ちで歌いますか。

〈歌う時に工夫すること〉



★今日の学習をした感想



【今日のがんばり度は・・・？】



一生懸命がんばった



ふつう

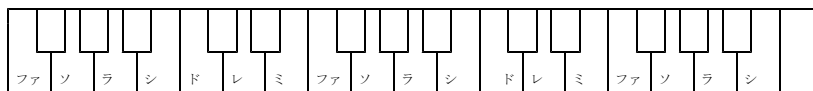


がんばれなかった

資料3 声域実態調査の結果

6月18日(水) 5校時 南小5年1組 37名
 「おなかの体操」の発声曲を使って調査

歌唱の領域を実施するにあたり、声域の実態を把握し、グループ学習の児童の編成を行う資料として、調査を行った。



番号	名前	性別	声域	声質	音程
1	RS	男	♪ ♭ラ-----ファ	細い	○
2	SS	男	♪ ラ-----ド	細い	△
3	SS	男	♪ ソ-----ラ	太い	△
4	RT	男	♪ ソ-----ド	太い	△
5	TU	男	♪ ♭ラ-----ファ	太い	○
6	ST	男	♪ ソ-----ラ	太い	△
7	KM	男	♪ ♭ラ-----ミ	細い	○
8	HM	男	♪ ラ-----ラ	細い	△
9	HS	男	♪ ソ-----ド	太い	△
10	ZH	男	♪ シ-----ラ	細い	○
11	DI	男	♪ シ-----ド	細い	△
12	TT	男	♪ シ-----ド	太い	△
13	SK	男	♪ ソ-----シ	太い	△
14	TI	男	♪ ♭シ-----ラ	細い	○
15	RS	男	♪ ♭シ-----♭レ	細い	○
16	KT	男	♪ ラ-----レ	細い	○
17	TS	男	♪ シ-----レ	細い	○
18	TN	男	♪ シ-----ミ	太い	◎
19	YY	男	♪ ラ-----ラ	太い	△
20	MK	男	♪ シ-----#ファ	細い	○
21	TS	男	♪ ♭シ-----レ	細い	○
22	YT	男	♪ ラ-----ソ	細い	◎
23	SO	男	♪ シ-----ド	太い	△
24	RK	女	♪ ♭ラ-----♭ミ	細い	◎
25	HS	女	♪ ♭ラ-----シ	細い	△
26	KU	女	♪ ラ-----ファ	細い	○
27	RS	女	♪ ラ-----ミ	細い	△
28	NS	女	♪ ♭ソ-----#ファ	太い	◎
29	MN	女	♪ ♭シ-----ミ	細い	△
30	SS	女	♪ ラ-----ソ	細い	◎
31	MO	女	♪ ♭シ-----ド	細い	○
32	KN	女	♪ ♭ラ-----レ	太い	◎
33	RT	女	♪ ソ-----ド	細い	△
34	MI	女	♪ ♭ラ-----ラ	細い	△

35	AK	女	♪ラ ----- ミ	細い	○
36	NM	女	♪♭ラ ----- ミ	細い	○
37	SO	女	♪ラ ----- シ	細い	○
38	MO	女	♪ラ ----- レ	細い	△
39	SS	女	♪♭シ ----- ラ	細い	△

〈考察〉

この調査を行って、音域の狭い児童が、男子に10名、女子に4名いることが分かり、この14名の児童は、話し声の音域で歌唱も行っていることが分かった。このことは、高音に行くほど、裏声を使って歌を歌うという技術面での技能が十分に身に付いておらず、地声で歌う児童の実態も分かった。また、しっかりと、音程の取れる児童は、男子2名、女子4名いることが分かり、この児童は、自分に自信を持って歌うことができていたので、グループ編成を行うのにリーダーとなれる児童も発見することができた。





次に声質についても、調査してみたが、声の細い児童は、男子13名、女子14名いることが分かり、声の太い声量のある児童は、男子に10名、女子2名いることが分かった。

この調査を通して、児童のグループ分けやパートリーダーとなる児童、また、ソプラノやアルトのパート分けも編成するのに役立つことができた。

二

一、

ビ ユー テイ フル ハ ト
 や さ し い
 ビ ユー テイ フル ハ ト
 だ か ら な か ま は
 た より に な る
 ひ と は
 こ こ ろ で
 む す ば れ て る
 み ん な の
 こ こ ろ を
 ビ ユー テイ フル ハ ト
 だ い じ に
 こ こ ろ
 ひ ユー テイ フル ハ ト
 か っ て
 い る
 ビ ユー テイ フル ハ ト
 き れ い な
 こ こ ろ
 ビ ユー テイ フル ハ ト
 つ ら い と き
 に も
 ひ と は
 こ こ ろ で
 え が お が
 い き て る
 か ら
 ある

♪ 「ビューティフル ハート」

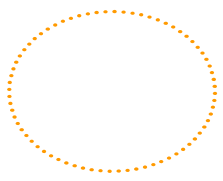
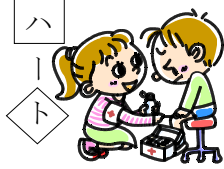
記 号 の 読 み 方

△ か 行・・・Kの発音を舌を使って行う
 ○ さ 行・・・Sの発音を息を使って行う
 ◇ た 行・・・Tの発音を舌を使って行う
 □ は 行・・・Hの発音を息を使って行う
 〡 ば 行・・・Bの発音を唇を使って行う

名 前

A

あ	ビ	う	ビ	ひ	ビ	ゆ	ビ	む	ひ	う	ビ	だ	ビ	お
し	ユ	た	ユ	ろ	ユ	た	ユ	ね	と	れ	ユ	ま	ユ	お
た	ー	っ	ー	が	ー	か	ー	に	は	し	ー	っ	ー	き
も	テ	て	テ	る	テ	な	テ	あ	こ	い	テ	て	テ	な
	イ		イ		イ		イ	あ	こ		イ		イ	
あ	フ	い	フ	ゆ	フ	こ	フ	ふ	こ	と	フ	い	フ	あ
か	ル	こ	ル	め	ル	こ	ル	れ	ろ	も	ル	て	ル	い
る		う				ろ		る	で	だ		も		
く	ハ		ハ		ハ		ハ			ち	ハ		ハ	
	ト		ト		ト		ト	な	う		ト		ト	
								み	た					
								だ	っ					
								も	て					
									い					
									る					



平成20年度 宮古島市立教育研究所職員

所 属 ・ 職 名	氏 名
所 長 主 幹 指 導 主 事	本 村 幸 雄 友 利 直 喜 乾 邦 夫
○適応指導教室「まていだ教室」 担 当 教 諭 指 導 員 指 導 員	宮 国 貴 子 松 本 美 智 子 上 地 千 鶴
○教育相談室 教 育 相 談 員 教 育 相 談 員 教 育 相 談 員 教 育 相 談 員	垣 花 征 一 普 天 間 裕 砂 川 和 子 久 貝 清 順

研 究 報 告 集 録 （ 第 4 号 ） 平 成 2 0 年 9 月 発 行

発 行 宮古島市立教育研究所

〒906-0392

沖縄県宮古島市下地字上地472-39

宮古島下地庁舎内3階

Phone : 0980-76-6400 Fax : 0980-76-6154

<http://www3.city.miyakojima.lg.jp/kenkyusyo/>
